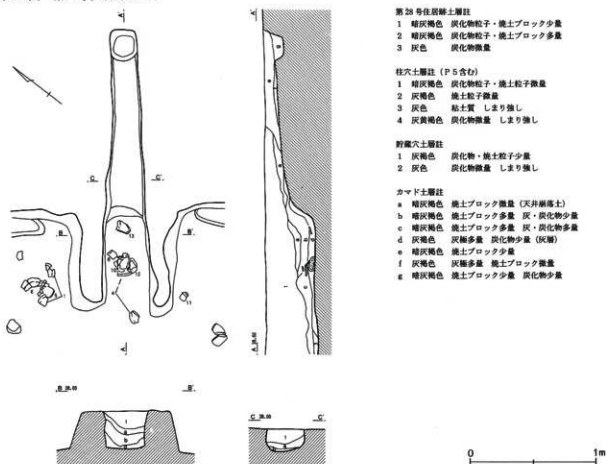


第129図 第28号住居跡カマド



第28号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土ブロック少量
- 2 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土ブロック多量
- 3 灰色 炭化物少量

柱穴土層註 (P5含む)

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子微量
- 2 灰褐色 焼土粒子微量
- 3 灰色 粘土質 しまり強し
- 4 灰黄褐色 炭化物少量 しまり強し

野糞穴土層註

- 1 灰褐色 炭化物・焼土粒子少量
- 2 灰色 炭化物少量 しまり強し

カマド土層註

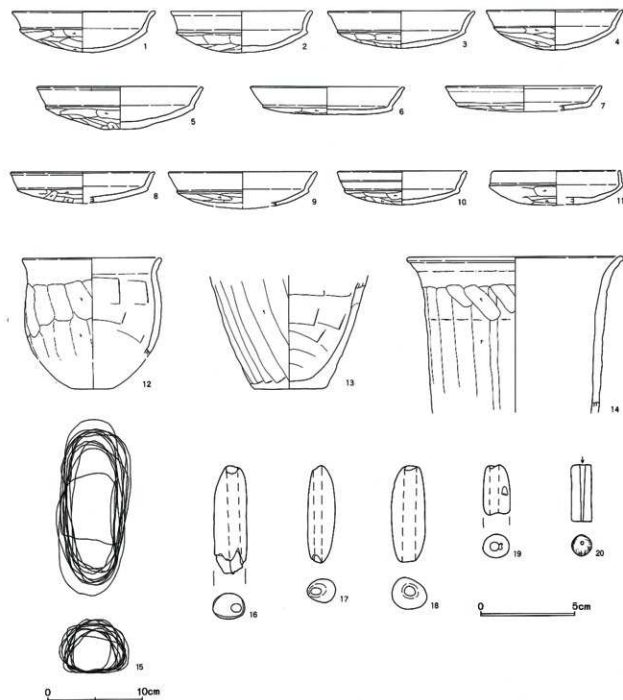
- a 暗灰褐色 焼土ブロック微量 (天井崩落土)
- b 暗灰褐色 焼土ブロック多量 灰・炭化物少量
- c 暗灰褐色 焼土ブロック多量 灰・炭化物多量
- d 灰褐色 炭種多量 炭化物少量 (炭種)
- e 暗灰褐色 焼土ブロック少量
- f 灰褐色 炭種多量 焼土ブロック微量
- g 暗灰褐色 焼土ブロック少量 炭化物少量

0 1m

第28号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	15.2	4.3	4.4	BCEGH	A	橙	80	カマド	
2	坏	15.0	4.4		BCDEGH	B	黒	65		
3	坏	(15.8)	4.0		BCEGH	A	橙	50		
4	坏	(14.6)	(4.2)		BCEGH	B	橙	30		
5	坏	17.8	4.5		BCDEGH	B	橙	50		
6	坏	16.6	3.0		BCEGH	B	橙	70		
7	坏	16.8	(2.3)		BCEGH	B	橙	25		
8	坏	(15.4)	(3.3)		BCEGH	A	明赤褐	15		カマド
9	坏	(15.6)	(3.9)		BCGH	C	鈍黄橙	30		
10	坏	(13.8)	3.6		BCEGH	A	橙	25		カマド
11	坏	(13.8)	(3.7)	BCEGH	B	明赤褐	15			
12	甕	14.8		7.4	BCEGH	B	鈍黄橙	85	カマド	
13	甕				BCEH	C	暗灰黄	40	カマドと北西コーナー部と接合	
14	甕	(23.2)			BCEGH	C	黄灰	25		
15	編物石								12個体 欠損	
16	土鉢	長(5.72)	径1.79	重(16.11)						
17	土鉢	長5.21	径1.64	重11.04						
18	土鉢	長5.05	径2.02	重18.75						
19	土鉢	長(2.61)	径1.46	重(4.71)					欠損	
20	管玉	長3.02	径1.07						碧玉製 一方向穿孔	

第130図 第28号住居跡出土遺物



道部底面はわずかに傾斜する。先端には煙出しピットが設けられる。燃焼部長0.85m、同幅0.35m、煙道部長1.40m、煙出しピットの深さは0.18mであった。河原石製の支脚が燃焼部中央から検出され、その直上からは10の環と12の小形の甕が出土した。12は底部が欠損しており、逆で検出されたことから、転用支脚の可能性もある。カマド覆土の遺存状況は良好で、灰層

の堆積が顕著であった。

出土遺物（第130図）

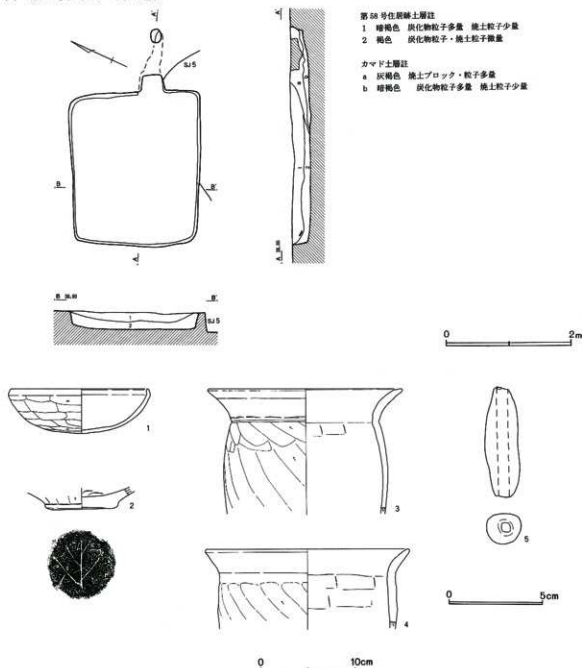
27住が本住居跡中央を壊していたことから、遺物はやや或少なく、カマド周辺を中心に散逸して出土した。

蓋模倣環は口縁部が大きく開くものが主体を占め、体部高が低いものも多い。口径が15cmを超えるものも8個体を数える。

細網石は12個体が散逸して出土した。いずれも壁に近い箇所からの出土である。長さ13.5cm前後のものが主体を占める。土錘は4個体出土した。20は碧玉製の

管玉である。片面に研磨痕が認められる。X線写真を撮影し、片側穿孔と判断した。

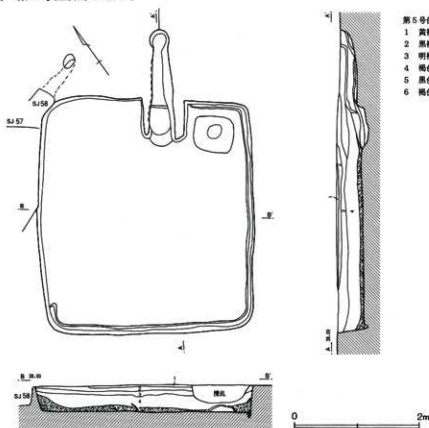
第131図 第58号住居跡・出土遺物



第58号住居跡出土遺物観察表

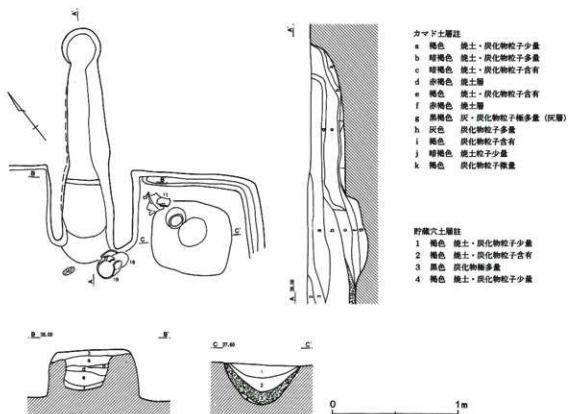
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.8	4.7	7.6	CEGH	B	橙	50	木葉痕
2	甕	(20.8)			BCGH	A	鈍褐	100	
3	甕				BCDEGH	A	鈍褐	50	
4	甕	21.8			BCGH	C	鈍黄橙	70	
5	土錘	長5.91	径1.93	重22.00					

第132図 第5号住居跡・カマド



第5号住居跡土層註

- 1 黄褐色 ローム粒子含有
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 3 明褐色 ローム粒子・赤色酸化粒子含有
- 4 褐色 焼土・炭化物粒子含有
- 5 黒色 炭化物主体 (炭化物層)
- 6 褐色 炭化物粒子微量



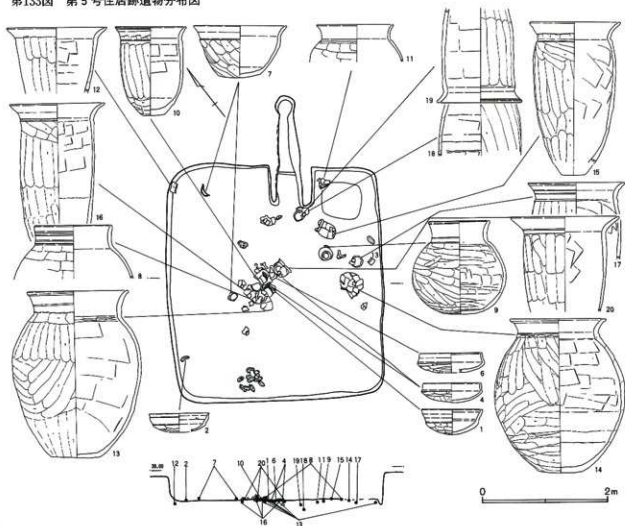
カマド土層註

- a 褐色 焼土・炭化物粒子少量
- b 暗褐色 焼土・炭化物粒子多量
- c 暗褐色 焼土・炭化物粒子含有
- d 赤褐色 焼土層
- e 褐色 焼土・炭化物粒子含有
- f 赤褐色 焼土層
- g 黒褐色 灰・炭化物粒子極多量 (灰層)
- h 灰色 炭化物粒子多量
- i 褐色 炭化物粒子含有
- j 暗褐色 焼土粒子少量
- k 褐色 炭化物粒子微量

貯蔵穴土層註

- 1 褐色 焼土・炭化物粒子少量
- 2 褐色 焼土・炭化物粒子含有
- 3 黒色 炭化物極多量
- 4 褐色 焼土・炭化物粒子少量

第133図 第5号住居跡遺物分布図



第58号住居跡 (第131図)

第58号住居跡はG-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第5、57号住居跡を切っていた。

主軸方向はN-65°-Eを指す。主軸長2.42m、副軸長約2.05mであり、縦長の長方形を呈する。覆土は概ね自然堆積を示すと考える。壁溝、ピット、貯蔵穴等の施設はなかった。カマドは東壁中央僅かに南よりから検出された。床面と同レベルの燃焼部から段を有さずに緩やかに煙道部に移行する。煙道部は僅かに傾斜していた。煙道部天井は残存していた。袖は検出されなかった。カマドの残存長は0.96mであった。

出土遺物 (第131図)

少量の遺物が覆土中より出土した。1の環は口縁部が小さく内屈する。体部へラケズリの範囲は口縁直下

から始まる。

第5号住居跡 (第132・133図)

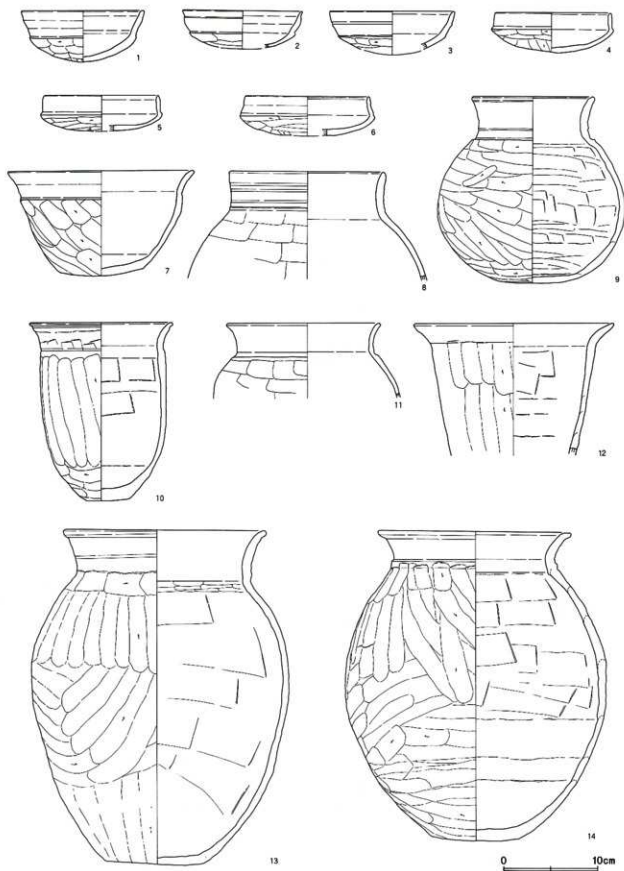
第5号住居跡はG-8・9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第57号住居跡を切り、第58号住居跡には切られるが、壁際のみ壊されており、残存状況は良好であった。残存壁高は0.40mであった。

主軸方向はN-37°-Eを指す。主軸長3.80m、副軸長3.43mであり、僅かに縦長の長方形を呈する。南、東壁際のみ壁溝が通る。

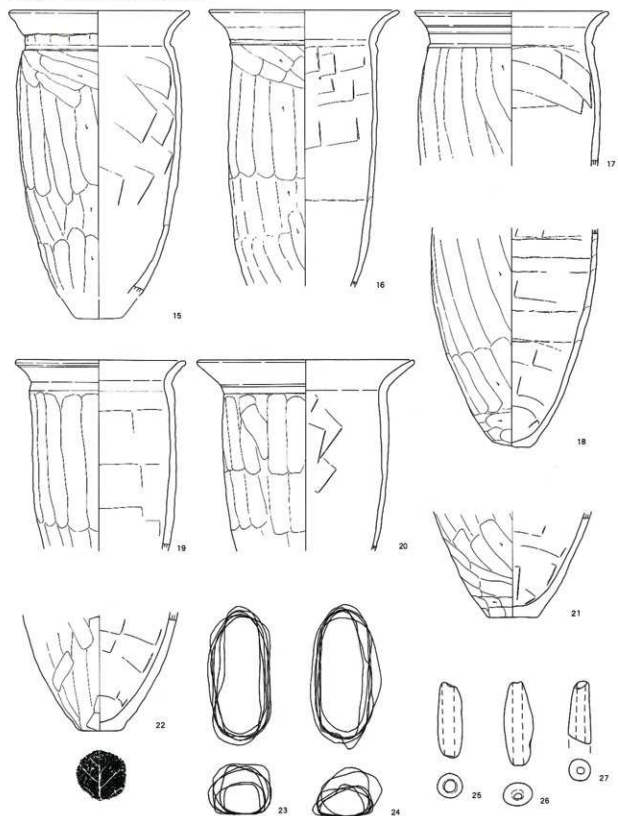
覆土最下層は炭化物層であった。なお貯蔵穴最下層からも炭化物層が確認された。

主柱と想定されるピットはなかった。平面形態が隅四方形の貯蔵穴がカマド右側から検出された。径0.63×0.57m、深さは0.33mであった。遺物は出土しな

第134图 第5号住居跡出土遺物(1)



第135図 第5号住居跡出土遺物(2)



0 10cm

0 5cm

ったが覆土最下層からは炭化物層が検出された。住居跡覆土第5層に対応すると思われる。

カマドは北壁中央僅かに東よりから検出された。床面からおよそ0.10m掘り込まれた燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に移行する。煙道部はほぼ水平であり、先端の平面形態はピット状を呈する。燃焼部長0.57m、同幅0.35m、煙道部長1.20m、同幅0.17mである。左袖はややオーバーハンクしていた。

カマド覆土の遺存状況も良好で、不注意から半截してしまっただ層は天井部の被熱痕を示していると思われる。また燃焼部中からは厚さ10cm程の灰層が検出された。なお土層観察から住居跡覆土第5層の炭化物層はカマドの一部崩落後に堆積したと思われる。

カマド内部からの遺物の出土はないが、右袖前方からは18、19の甕が出土した。胴部上半から上を欠失した逆位の18に重なって、胴部上半以下を欠失した19が検出された。袖補強材の可能性が高い。なお左袖前方から

は甕胴部が出土している。残存率が悪く、図化し得なかったが出土位置からすると左袖補強材の可能性が高い。

出土遺物 (第134・135回)

遺物は床面直上から比較的多く出土した。床面はほぼ中央からの出土量が多かった。甕等の大形品の出土が多い傾向にあった。

環は蓋模倣、身模倣、有段口縁が出土したが、いずれも口径が小さい。1の環は2次被熱痕が認められた。

13の甕は頸部内面にミガキ様のヘラケズリを施す。15の甕口縁部下位には断続ナデの痕跡が明瞭に残る。編物石は南壁際から集中して12個体出土している。長さ14cm、幅6cm前後で形態は近似している。

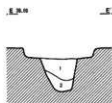
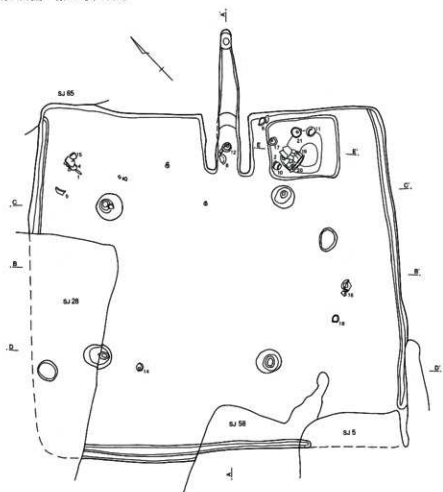
第57号住居跡 (第136・137回)

第57号住居跡はF-8、G-8・9グリッドに位置する。他遺構との重複関係は、第65号住居跡を切り、第5、28、58号住居跡に切られるが、28号住に床面の一部を壊されていた以外は壁際のみ覆われており、残

第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(13.2)	5.5		BCDEGH	B	橙	20	二次被熱
2	環	(12.8)	(4.1)		BCEGH	B	橙	40	
3	環	(13.4)	(4.6)		BCGH	B	明赤褐	35	
4	環	12.6	4.3		BCEGH	B	橙	95	
5	環	(12.4)	(3.8)		BCEGH	A	明赤褐	20	
6	環	(13.4)	(4.2)		BCEGH	A	明赤褐	20	
7	鉢	20.0	11.1	8.9	BCEGH	B	橙	65	
8	壺	(16.7)			BCEGH	B	橙	30	
9	壺	13.2	19.8		BCDEFGH	A	明赤褐	100	
10	甕	15.3	20.0	4.6	BCEGHJ	B	橙	80	底部未調整
11	甕	16.5			BCGH	B	橙	100	
12	甕	(21.4)			BCEFGH	B	橙	20	
13	壺	22.2	35.4	10.4	BCDEGH	B	鈍褐	65	
14	壺	20.6	32.8	9.1	BCEGH	B	橙	90	
15	甕	19.4			BCDEGH	B	明褐	85	頸部断続ナデ明瞭
16	甕	20.2			BCEGH	B	鈍橙	70	
17	甕	20.8			BCEGH	B	橙	100	
18	甕			4.2	BCEGH	A	橙	100	右袖補強材
19	甕	18.2			BCDEGH	B	鈍褐	80	右袖補強材
20	甕	23.2			BCEGH	B	橙	80	
21	甕			5.0	BCEGH	A	明赤褐	50	
22	甕			5.2	BCEGH	B	橙	70	木葉痕
23	編物石								6個体
24	編物石								6個体
25	土錘	長3.92	径1.42	重6.50					
26	土錘	長4.48	径1.65	重9.65					
27	土錘	長(3.35)	径(1.22)	重(4.14)					欠損

第136図 第57号住居跡



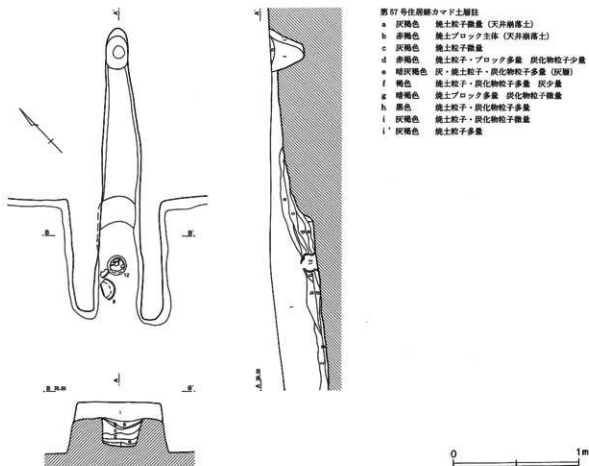
第57号住居跡土層柱
 1 灰褐色 炭化物・粘土粒子微量
 2 暗灰褐色 炭化物粒子微量

柱穴土層柱
 1 暗灰褐色 焼土ブロック少量
 炭化物粒子微量
 2 灰黄褐色 焼土ブロック微量
 しまり強し
 3 灰黄褐色 しまり強し

貯蔵穴土層柱
 1 灰褐色 焼土ブロック少量
 炭化物微量
 2 暗灰褐色 焼土粒子微量

0 2m

第137図 第57号住居跡カマド



存状況は概して良好であった。

主軸方向はN-45°-Eを指す。主軸長5.45m、副軸長5.90mであり、方形を呈する。壁溝が断続しながら巡る。カマド付近の床面が緩やかに高まっていた。

主柱穴の深さはP1=0.50m、P2=0.66m、P3=0.55m、P4=0.53mである。主柱穴底面はいずれも径0.21m、深さ0.02mほど1段低くなっており、あるいは柱痕に対応するのであろうか。柱間はP1-2.68m-P2-2.65m-P3-2.40m-P4-2.85m-P1であった。

貯蔵穴がカマド右側から検出された。径1.13×0.96mの平面形態方形の浅い掘り込みのほぼ中央が、径0.58×0.69mの円形に掘り込まれていた。深さは0.51mであった。遺物は多量に出土したが、いずれも1段目底面からの出土であった。

カマドは北壁中央から検出された。床面と同レベル

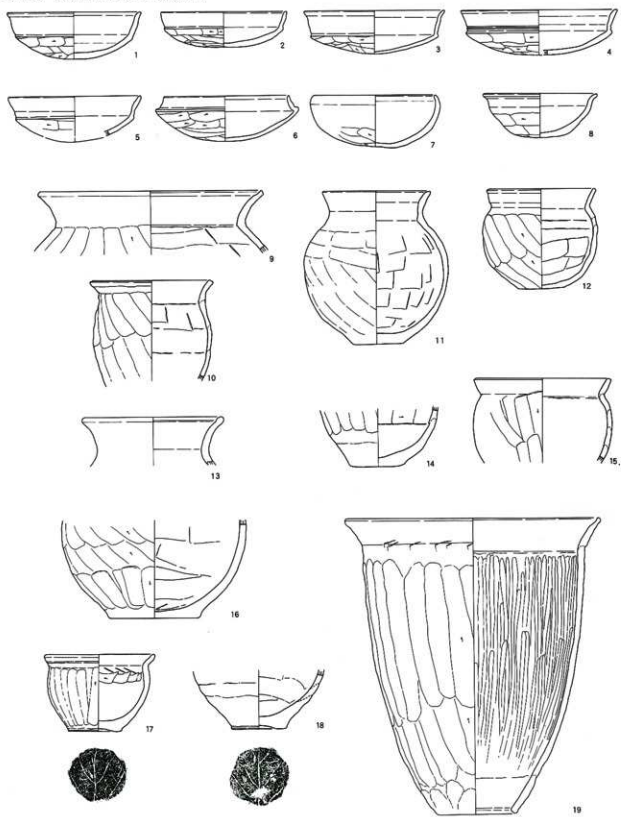
の燃焼部から強く立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は緩やかに傾斜する。先端からは深さ0.26mの煙出しピットが検出された。燃焼部長0.98m、同幅0.31m、煙道部長1.30m、同幅0.26mである。左袖はオーバーハングしていた。袖内面の被熱硬化は顕著であった。カマド内部からは12の小形甕が逆位で検出された。転用支脚と思われる。カマド覆土の遺存状況は良好で、天井崩落土が明瞭に識別できた。また厚さ5cm程の灰層が検出された。

出土遺物 (第138・139図)

遺物は貯蔵穴からまともに出土した以外は、床面全域から散逸して少量出土した。

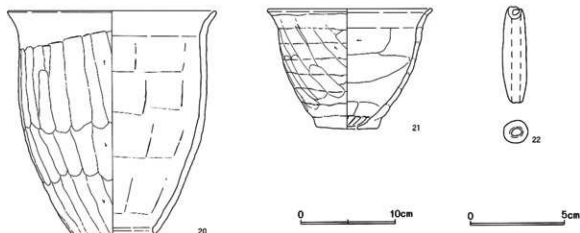
貯蔵穴出土土器の器種は坏1、小形甕2、甌3であった。特に甌はすべて完形であり、口径はほぼ5cmきざみである。大、中、小形甌とも言え、良好なセットを示していると言える。

第138图 第57号住居跡出土遺物(1)



0 10cm

第139図 第57号住居跡出土遺物(2)



第57号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.4	5.0		BCEGH	B	橙	70	
2	坏	(13.6)	3.8		BCEGH	A	暗褐	35	貯藏穴上層
3	坏	(15.0)	4.6		BCEGHJ	B	橙	35	
4	坏	(16.6)	(4.8)		BCEGH	B	鈍橙	25	
5	坏	(14.2)	(4.8)		BCEGH	B	橙	20	
6	坏	13.4	4.8		BEGH	C	鈍橙	100	
7	坏	13.2	5.5		BCEGH	A	鈍赤褐	70	胎土分析 NO13
8	鉢	(12.2)	4.7	5.2	BCEGHJ	B	橙	40	カマド
9	壺	(24.2)			BCDGH	A	鈍赤褐	25	貯藏穴上層
10	甕	13.2			BCEGH	B	鈍赤褐	90	
11	壺	11.6	16.2	5.4	BCGH	B	橙	85	貯藏穴上層
12	甕	11.6	10.8	4.9	BCEGH	B	橙	80	カマド 転用支脚
13	壺	(15.2)			BCDEGH	B	鈍黄橙	25	
14	甕			5.8	BCEGH	B	橙	100	
15	甕	(14.6)			BCEGH	B	明赤褐	15	
16	壺			9.8	BCDEGH	A	明赤褐	60	
17	甕	11.8	8.2	5.7	BCDEGH	B	橙	100	貯藏穴上層 木葉痕
18	甕			6.2	BCDEGH	A	橙	80	木葉痕
19	甎	27.2	31.3	8.2	BCDEGH	B	鈍黄橙	100	貯藏穴上層
20	甎	22.4	23.6	9.0	BCEGHJ	B	橙	100	貯藏穴上層
21	甎	17.6	12.8	6.6	BCEGH	B	褐	100	貯藏穴上層 孔径2.5cm
22	土錘	長(5.10)	径1.44	重8.85					

第8号住居跡(第140図)

第8号住居跡はG-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第7、26号住居跡を切っていた。

主軸方向はN-38°-Eを指す。主軸長2.70m、副軸長3.93mであり、横長の長方形を呈する。

覆土は概ね自然堆積を示すと考えられるが、各層とも炭化物の含有が多かった。

壁溝、ピット、貯藏穴等の施設はなかった。住居跡南側覆土最下層に炭化物の分布が認められた。

カマドは北東コーナーより検出された。不整形に浅く掘削された燃焼部から緩い段を有し煙道部に移行する。煙道部天井は残存しており天井面の被熱硬化は著しかった。煙道部先端プランは不整形であった。径0.25mほどの開口部が検出された。燃焼部底面の被熱硬化は顕著であった。

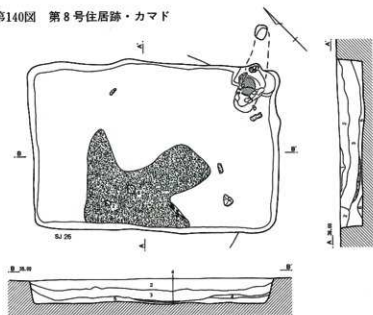
両袖とも崩落がやや顕著であったが、左袖内面には大形甕破片が密着しており、袖補強材の可能性が高い。ただし土器の二次被熱は不明瞭であり、袖の土器密着

箇所の被熱硬化も顕著であった。カマド前方から検出された河原石は支脚と思われる。カマド規模は燃焼部長0.42m、同幅0.35m、煙道部長0.61m、同幅0.32mである。

出土遺物 (第141図)

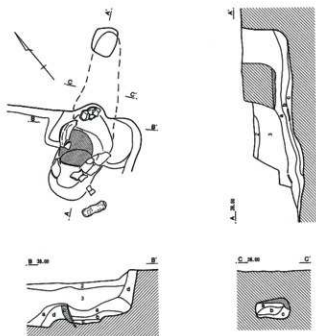
少量の遺物が覆土下層より出土した。出土した環の形態はバラエティーに富む。3と7はカマド内面からの出土である。

第140図 第8号住居跡・カマド



第8号住居跡土層註

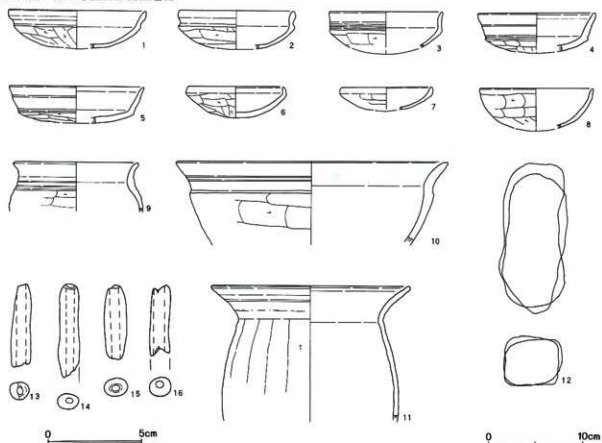
- 1 黒灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子多量
- 4 暗灰褐色 炭化物粒子・炭化材片極多量
- 5 灰色 炭化物粒子多量 焼土ブロック少量
- 6 灰色 酸化鉄粒子多量



カマド土層註

- a 灰褐色 土器片多量 焼土粒子少量
- b 灰褐色 炭化物粒子多量
- c 赤褐色 (焼土層)
- c' 赤褐色 (軸筋赤土)
- d 暗灰色 焼土粒子極量

第141図 第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.8)	(4.1)		BCEGH	A	橙	15	
2	坏	(12.4)	(4.2)		BCDEGH	B	鈍黄橙	50	
3	坏	(12.2)	(4.5)		BCDEFGH	B	橙	45	カマド
4	坏	(12.6)	(4.2)		BCDEGH	B	橙	20	
5	坏	(14.4)	(3.9)		BEGH	A	灰黄褐	35	
6	坏	(10.4)	3.3		BEH	A	鈍褐	65	
7	坏	(9.6)	(2.6)		BCEGH	B	橙	65	カマド
8	坏	(12.2)	(4.5)		BCGH	B	橙	15	
9	鉢	(13.4)			BCEGH	B	橙	20	
10	鉢	(29.2)			BCEGH	B	橙	10	
11	甕	(21.2)			BCEGH	B	橙	30	カマド
12	編物石								2個体
13	土錘	長4.53	径1.22	重5.42					
14	土錘	長(5.02)	径1.21	重(5.71)					欠損
15	土錘	長3.96	径1.30	重5.07					
16	土錘	長(3.74)	径1.16	重(4.25)					欠損

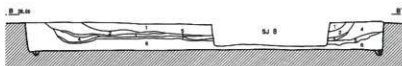
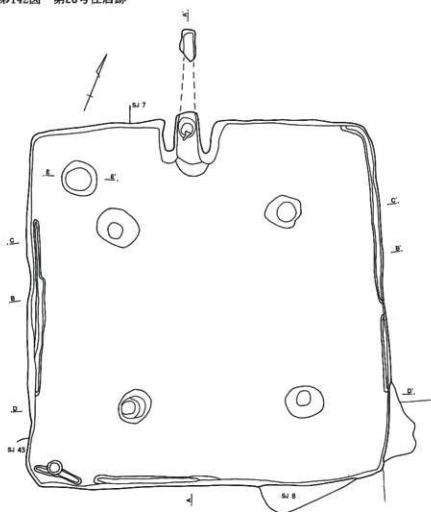
第26号住居跡 (第142～144図)

第26号住居跡はG-7・8、H-7グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第8号住居跡に切られ、第7、43号住居跡を切る。なお本住居跡の床面は、第8号住居跡よりも深く、遺構の遺存状況は概ね良好で

あった。覆土は概ね自然堆積を示すと考えるが、第1～5層には炭化物、焼土ブロックの含有が多かった。

主軸方向はN-2I' -Wを指す。主軸長5.76m、副軸長5.73mであり、方形を呈する。断続しながら壁溝が壁際を巡る。

第142図 第26号住居跡



第26号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 焼土ブロック多量 炭化物少量
- 2 灰褐色 焼土ブロック少量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子多量 焼土粒子少量
- 4 灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子微量
- 5 暗褐色 炭化物粒子多量 焼土粒子少量
- 6 灰褐色 礫・焼土粒子少量
- 7 灰色 粘土質 炭化物粒子微量
- 8 暗灰褐色 炭化物粒子微量

柱穴土層註

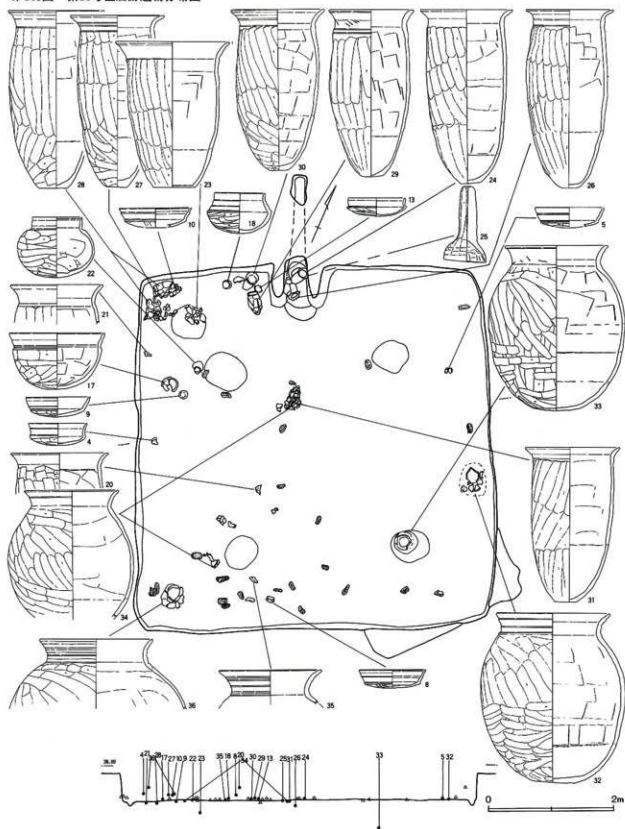
- 1 灰褐色 炭化物粒子多量
- 2 灰黄褐色 炭化物粒子微量
- 3 灰色 炭化物粒子微量
- 4 灰褐色 炭化物粒子微量
- 5 灰黄褐色 炭化物粒子多量

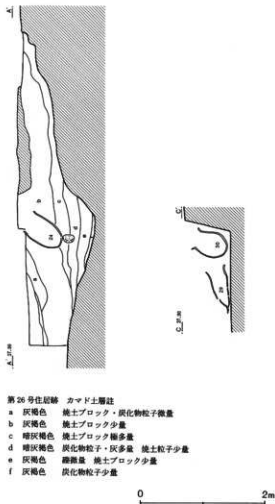
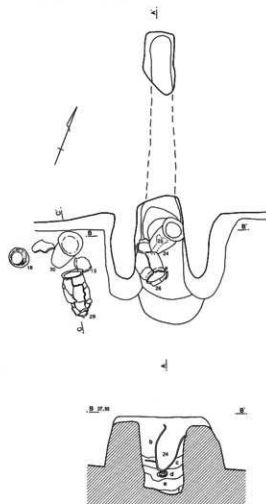
貯蔵穴土層註

- 1 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量



第143图 第26号住居跡遺物分布图





第26号住居跡 カマド土層註
 a 灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子微量
 b 灰褐色 焼土ブロック少量
 c 暗灰褐色 焼土ブロック極少量
 d 暗灰褐色 炭化物粒子・灰多量 焼土粒子少量
 e 灰褐色 腐植層 焼土ブロック少量
 f 灰褐色 炭化物粒子少量

0 2m

主柱穴の深さはP1=0.62m、P2=0.67m、P3=0.63m、P4=0.52mである。柱間はP1-2.97m-P2-2.81m-P3-2.83m-P4-2.75m-P1であった。P2中からは大型の甕が出土している。

カマド左側から貯蔵穴が検出された。径0.56×0.53m、深さ0.42mの平面円形を呈する。上層から遺物が出土している。

カマドは北壁中央僅かに左よりから検出された。床面から明瞭に掘り込まれた燃焼部を有する。ただし土層観察および土製支脚の出土レベルから、燃焼部の最終使用面はd層上面と推定される。したがってカマド構築時は明瞭な立ち上がりを持って煙道部に移行していたが、最終段階には灰が厚く堆積していたことから、燃焼部から緩やかに傾斜して煙道部に至っていたと思われる。煙道部底面は緩やかな段を有しながら傾斜し

ていた。煙道部天井は未崩落の状況であった。燃焼部長0.82m、同幅0.33m、煙道部長1.30m、同幅0.23mであった。

カマド内部からは土製支脚が横位で出土した。またその直上からは24の甕が正位で検出され、その前方からは26の甕が横位で検出された。

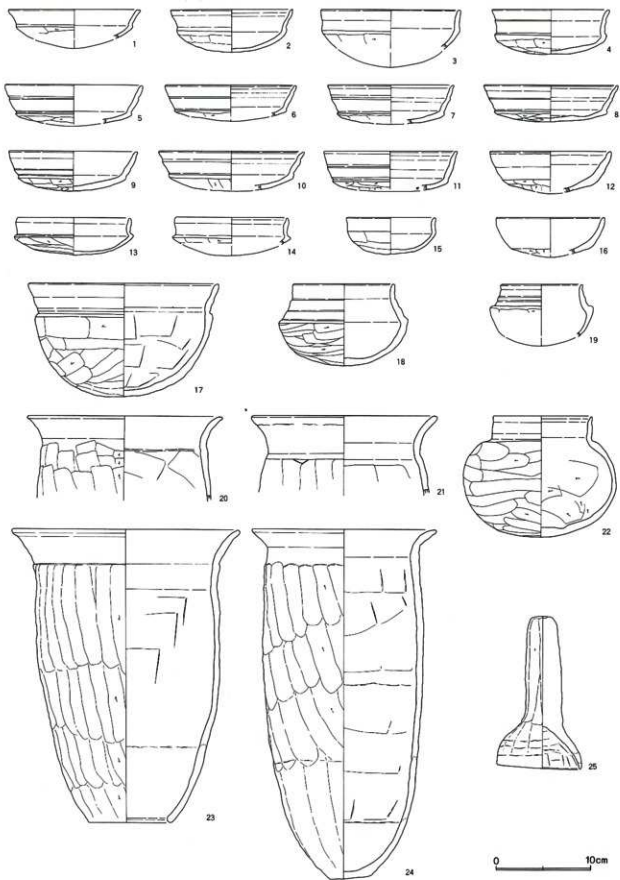
出土遺物（第145～147図）

多量の遺物が覆土下層～床面直上から出土した。特にカマド周辺、貯蔵穴周辺からの出土量が顕著であった。また出土土器の器種組成を概観すると、長胴甕、大型壺類が特に多い傾向がある。

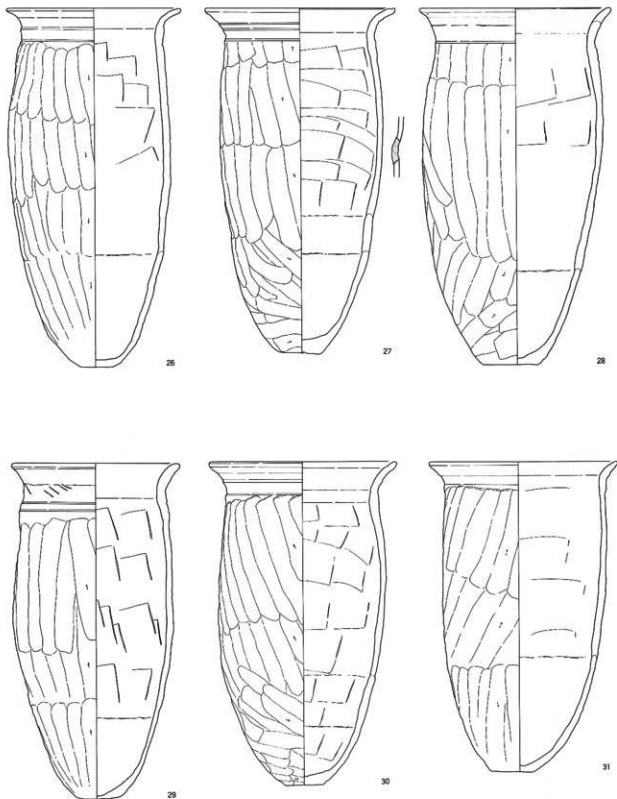
環は有段口縁環の比率が高い。ただし4の有段口縁環等、覆土上層～中層にかけて出土したのものもある。

カマド内面から横転して出土した25の土製支脚は中実棒状の器受部と内嚙する脚部からなる。外面はへら

第145图 第26号住居跡出土遺物(1)

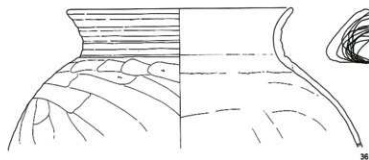
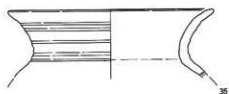
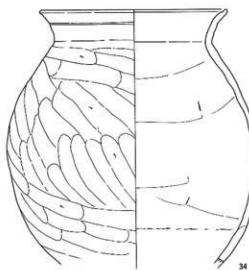
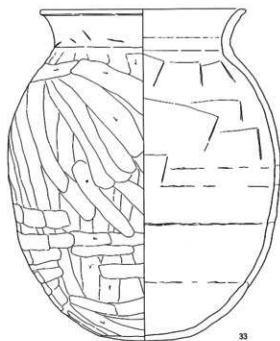
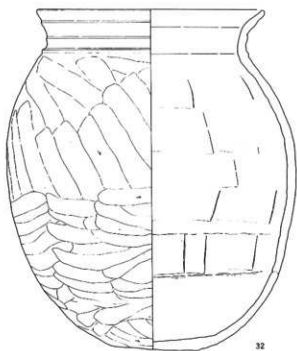


第146図 第26号住居跡出土遺物(2)



0 10cm

第147図 第26号住居跡出土遺物(3)



0 10cm

0 5cm

第26号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	環	(14.2)	(4.1)		BCEGH	A	橙	25	白色粘土含有	
2	環	(13.1)	4.5		BCEGH	B	橙	35		
3	環	(15.0)	(6.1)		BCDEGH	B	橙	20		
4	環	(12.6)	4.7		BCEGH	B	橙	30		
5	環	(14.8)	(4.4)		BCDEGH	C	鈍黄橙	25		
6	環	(14.0)	(3.8)		BCDEGH	A	鈍橙	25		
7	環	13.5	(4.1)		BCDEGH	C	鈍褐	20		
8	環	14.3	3.9		BCDEGH	A	鈍黄橙	65		
9	環	13.6	4.2		BCEGHI	B	橙	100		
10	環	(15.6)	(4.3)		BCDEGH	A	鈍橙	15		
11	環	(14.2)	(4.2)		BCEGH	C	鈍褐	20		
12	環	(13.0)	(4.5)		BCEGH	B	鈍褐	30		
13	環	12.0	4.0		BCEGH	A	橙	60		
14	環	(12.0)	(4.0)		BCDFGH	A	鈍橙	25		
15	環	9.6	3.9		BCEGH	B	橙	90		
16	環	(11.6)	(4.2)		BCEGH	B	橙	30		
17	鉢	20.4	12.0		BCEGHJ	A	暗褐	75		
18	鉢	11.0	8.7		BCDEGHJ	A	橙	100		
19	鉢	8.8			BCDEGH	B	橙	20		
20	甕	(20.8)			BCDEGH	B	鈍橙	25		
21	甕	19.8			BCEGH	B	灰黄褐	25		
22	壺	10.6	12.9		BCEGH	A	橙	100		
23	瓶	(24.4)	31.0	8.8	BCEGH	B	鈍橙	70		貯蔵穴
24	甕	19.6	36.9	4.1	BCEGH	B	鈍橙	100		カマド
25	支脚	(9.2)	16.2	2.2	BCEH	A	赤	95		カマド
26	甕	18.8	38.0	3.5	BCEGH	A	鈍赤褐	85		カマド
27	甕	20.2	36.5	3.4	BCDEGH	A	鈍褐	90		補修痕あり
28	甕	20.5	37.8	6.0	BCEGH	A	灰黄褐	80		
29	甕	18.2	35.5	4.5	BCEGH	B	橙	80		
30	甕	20.1	34.2	3.8	BCEGH	A	橙	100		
31	甕	20.2	32.7	4.5	BCEGH	B	橙	90		細礫多
32	壺	24.6	36.2	9.1	BCEGH	A	鈍黄橙	70		SJ-8、SJ-43上層と接合
33	壺	22.0	35.5	9.6	BCDEGH	A	橙	90		P2中
34	壺	20.1			BCDEGH	A	橙	65		破砕後二次被熱
35	壺	22.0			BCEGH	C	鈍黄橙	25		
36	壺	24.2			BCEGH	A	橙	80		
37	編物石									13個体
38	編物石									13個体
39	土鏝	長4.73	径1.20	重6.62						

ケズリ調整され棒状の部分は不整な多角形を呈する。

長胴甕は、完形に近い個体が7個体出土しており注目される。いずれも最大径を口縁部にもち、胴部は膨らまない。口縁部は大きく外反するものである。また口縁部は有段を呈するものが主体を占める。なおほとんどの長胴甕の出土位置はカマド左側～北西コーナー部付近であった。

27の甕は胴部中に補修粘土痕が明瞭に残る。粘土

痕には砂粒の移動は認められないことから、外面縦位へラケズリ段階で孔が開き、それを焼成前に粘土により内面より補修したものと思われる。

33の大形壺は主柱穴P2中より出土しており、柱抜き取り後の埋置の可能性が高い。34の壺は破砕後の二次被熱が顕著である。また編物石も住居跡南側から散逸して計26個体出土している。長さ14cm前後が主体を占め、形態はいずれも近似している。

第7号住居跡 (第148・149図)

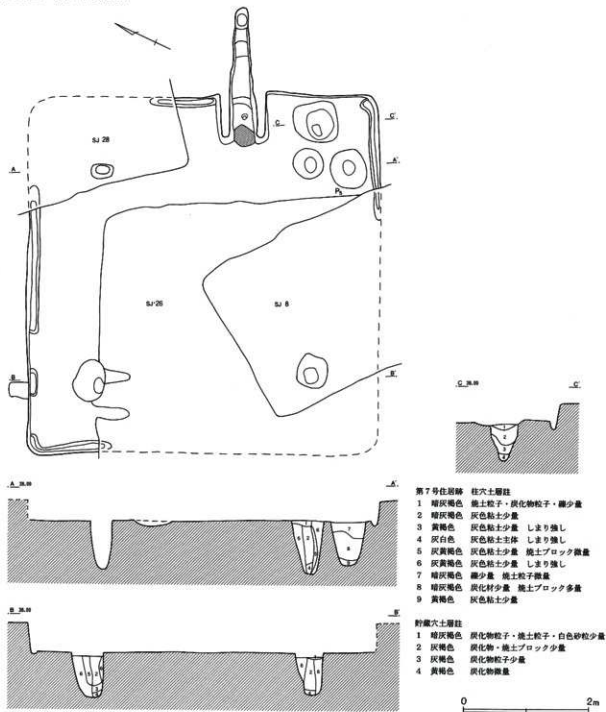
第7号住居跡はG-7・8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第28、26、8号住居跡に切られる。なお本住居跡と第26号住居跡の床面はほぼ同一レベルであった。したがって覆土の残存状況は悪かった。

主軸方向はN-65°-Eを指す。主軸長は推定で5.7m、副軸長推定5.6mであり、方形を呈すると思わ

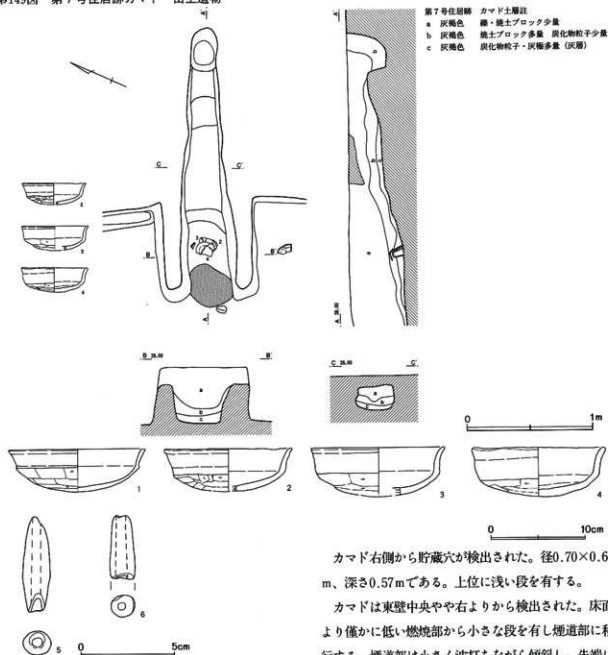
れる。断続した壁溝が巡る。

主柱穴の深さはP1=0.85m、P2=0.68m、P3=0.72m、P4=0.77mである。柱穴覆土第2層は柱痕を示すと考えられる。柱間はP1-3.35m-P2-3.39m-P3-3.42m-P4-3.32m-P1であり規格性が強い。またP1と隣接してP5が検出された。深さ0.66mと深い。貯蔵穴の可能性もある。

第148図 第7号住居跡



第149図 第7号住居跡カマド・出土遺物



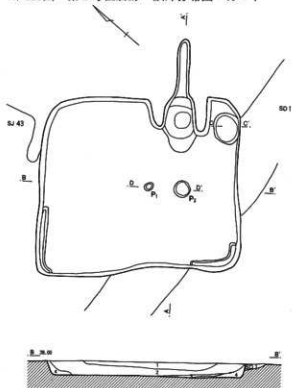
カマド右側から貯藏穴が検出された。径0.70×0.64m、深さ0.57mである。上位に浅い段を有する。

カマドは東壁中央やや右よりから検出された。床面より僅かに低い燃焼部から小さな段を有し煙道部に移行する。煙道部は小さく波打ちながら傾斜し、先端には明確な掘り込みの煙出しピットを有する。煙道部天井が一部残存していた。燃焼部長0.73m、同幅0.32m、煙道部長1.40mであった。燃焼部火床の被熱硬化が顕

第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.6)	4.5		BCDEGH	B	橙	60	
2	坏	(13.8)	(4.5)		BCEGH	B	鈍橙	40	カマド 匂がみ強し
3	坏	(14.2)	(5.2)		BCDEGH	B	橙	65	カマド
4	坏	14.2	5.1		BCEGH	C	灰黄	90	カマド 匂がみ強し
5	土錘	長5.05	径1.50	重8.82					
6	土錘	長(3.35)	径(1.47)	重(6.44)					欠損

第150図 第2号住居跡・鉄滓分布図・カマド



第2号住居跡土層註

- 1 明褐色 焼土・炭化物粒子含有
- 2 褐色 焼土・炭化物粒子含有
- 3 暗褐色 炭化物・炭化物粒子多量
- 4 明褐色土 焼土粒子・炭化物粒子混入

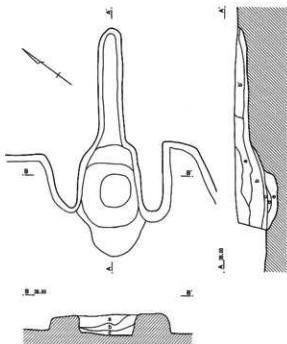
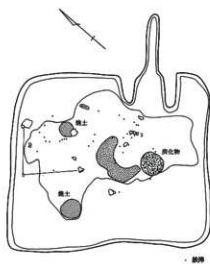
P1・2土層註

- 1 黒色 炭化物粒子主体
- 2 赤褐色 焼土化したローム主体
- 3 褐色 焼土・ローム混量
- 4 褐色 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子含有

貯蔵穴土層註

- 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- 2 褐色 焼土・炭化物粒子混量

0 2m



カマド土層註

- | | |
|--------------------|-------------------|
| a 暗褐色 焼土・炭化物粒子混量 | d 赤褐色 焼土主体 |
| b 褐色 焼土・炭化物粒子含有 | e 褐色 焼土粒子多量 しまり強し |
| b' 褐色 焼土ブロック含有 | |
| c 黒褐色 炭化物粒子多量 (炭層) | |
- 0 1m

著であった。燃焼部上には土製支脚が正位で検出され、それを覆うように3個体の環が逆位で出土した。なお3、4は口縁、稜部等やや粗雑な成形である。

出土遺物 (第149図)

第26号住居跡等にその大半を壊されていたため、本住居跡所属と認定できた遺物は、上記のカマド内出土以外は僅少であった。土鍾は2個体出土した。

第2号住居跡 (第150図)

第2号住居跡はH-8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第43号住居跡を切る。また重複関係で注目すべきは、第1号溝より本住居跡が「新しい」という点である。なお本住居跡群で他に第1号溝と重複が確認されたのは第43号住居跡であり、第1号溝に壊されている。主軸方向はN-52°-Eを指す。主軸長2.85m、副軸長3.17mであり、僅かに横長な方形を呈すると思われる。断続した壁溝が巡る。主柱穴はなかった。

カマド右側から貯蔵穴が検出された。平面形態円形で径0.41×0.48m、深さ0.08mである。遺物は出土し

なかった。

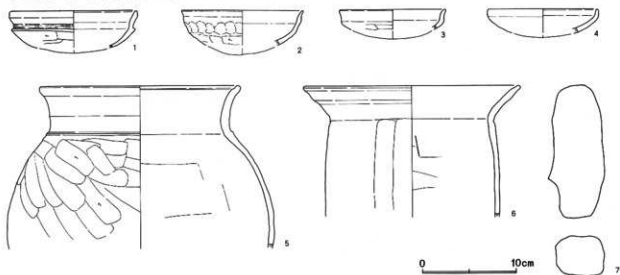
カマドは北壁よりから検出された。燃焼部からは深さ0.10mほどの円形の掘方が検出された。掘方中は焼土粒子を多量に含有した褐色土で充填される。灰層は床面とはほぼ同レベルに堆積していた。また煙道部への移行は比較的緩やかであった。燃焼部長0.56m、同幅0.42m、煙道部長0.92m、同幅0.20mであった。

出土遺物 (第151図)

本住居跡の床面直上からは、鉄滓が検出された。直径0.3~1.0cm程のもので、鍛冶滓と思われる。ただし鉄製品、鍛造判片等は検出されなかった。なお鉄滓分布範囲からは、3箇所焼土の集中部分、1箇所から炭化物の集中部分が検出された。それらの直下からはP1、2が検出された。いずれも覆土下層からは焼土ブロックが検出されており、鍛冶関連の施設の可能性もある。なお本遺跡で鍛冶関連の遺物が出土した遺構は、第83号住居跡から羽口が2個体出土している。

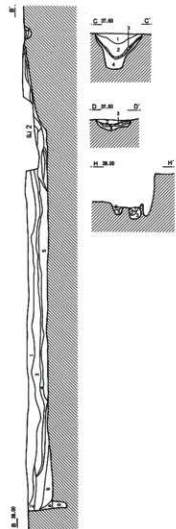
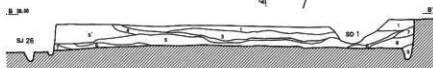
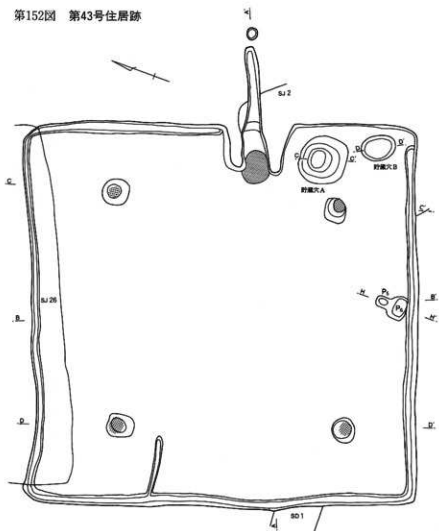
出土した土器はいずれも残存率が低かった。

第151図 第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(13.7)	(4.4)		BCDEGH	B	鈍赤褐	15	指頭匠痕明瞭
2	環	(13.0)	(4.7)		BCEH	A	橙	25	
3	環	(11.4)	(3.0)		BC	B	橙	20	
4	環	(11.6)			BC	B	橙	25	
5	壺	(21.6)			BCEGH	B	鈍橙	25	
6	甕	(23.2)			BCEGH	B	橙	15	
7	編物石							1個体	



第43号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物微量
- 2 灰褐色 炭化物少量
- 3 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化物粒子微量
- 4 灰黄褐色 灰・炭化物多量 焼土粒子微量
- 5 灰黄褐色 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 6 灰黄褐色 炭化物粒子多量 焼土ブロック極多量 灰少量
- 7 灰黄褐色 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 8 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 9 暗灰褐色 炭化物粒子微量

柱穴土層註

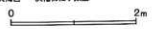
- 1 暗褐色 炭化物粒子多量 焼土粒子少量 部分中に空洞
- 2 灰黄褐色 炭化物粒子微量 灰色粘質土含有
- 2' 灰色 灰色粘質土多量
- 3 灰色 粘質土主体 炭化物粒子微量
- 3' 灰色 炭化物粒子多量

野築穴A・B土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物少量 焼土粒子微量 炭化鉄粒子多量
- 2 灰褐色 炭化物少量 焼土粒子微量 炭化鉄粒子多量
- 3 黒褐色 (炭化粉) 炭化鉄粒子多量
- 4 褐色 炭化物多量 焼土粒子微量 炭化鉄粒子少量

P 6・7土層註

- 1 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 3 灰褐色 炭化物粒子微量



第43号住居跡 (第152～154図)

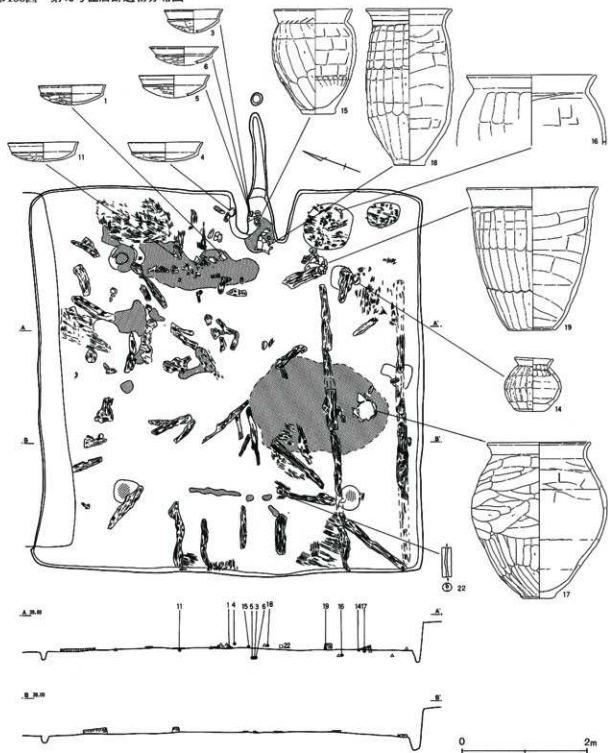
第43号住居跡はG-8、H-7、8グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第2、26号住居跡、第1号溝跡に切られるが、いずれも壁際のみ壊されており、遺存状況は概ね良好であった。なお本住居跡と第26号

住居跡の床面はほぼ同一レベルであった。

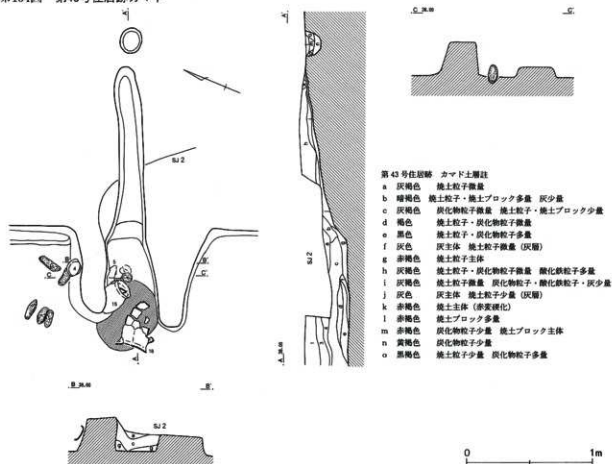
本住居跡はいわゆる焼失住居であり、多量の炭化材が床面直上から検出された。ただし壁溝覆土および壁際の三角堆積土は炭化物、焼土の含有が少なかった。

主軸方向はN-7Z - Eを指す。主軸長6.10m、副

第153図 第43号住居跡遺物分布図



第154図 第43号住居跡カマド



- 第43号住居跡 カマド土層柱
- a 灰褐色 焼土粒子微量
 - b 暗褐色 焼土粒子・焼土ブロック多量 灰少量
 - c 灰褐色 炭化物粒子微量 焼土粒子・焼土ブロック少量
 - d 褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量
 - e 黒色 焼土粒子・炭化物粒子多量
 - f 灰色 灰主体 焼土粒子微量 (灰層)
 - g 赤褐色 焼土粒子主体
 - h 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子微量 酸化鉄粒子多量
 - i 灰褐色 焼土粒子微量 炭化物粒子・酸化鉄粒子・灰少量
 - j 灰色 灰主体 焼土粒子少量 (灰層)
 - k 赤褐色 焼土主体 (赤炭酸化)
 - l 赤褐色 焼土ブロック多量
 - m 赤褐色 炭化物粒子少量 焼土ブロック主体
 - n 黄褐色 炭化物粒子少量
 - o 黒褐色 焼土粒子少量 炭化物粒子多量

軸長6.17mである。貯蔵穴周辺以外、壁溝が断絶せずに通っていた。また西側壁溝と直交するように、同レベルの深度を持つ間仕切り状の溝が検出された。

主柱穴の深さはP1=1.42m、P2=1.02m、P3=1.33m、P4=1.15mである。いずれも柱痕を確認できた。柱痕覆土からは炭化した木片が検出されたが、遺存状況は悪く、空洞になっていた部分が多かった。P4上層には床面直上の炭化物が堆積しており、本住居跡の焼失段階には主柱は床面上には出ていなかったと思われる。柱痕径はおよそ0.19mであった。

柱間はP1-3.53m-P2-3.63m-P3-3.70m-P4-3.60m-P1であり規格性が強い。住居跡規模からすると、やや柱間が広いと言える。

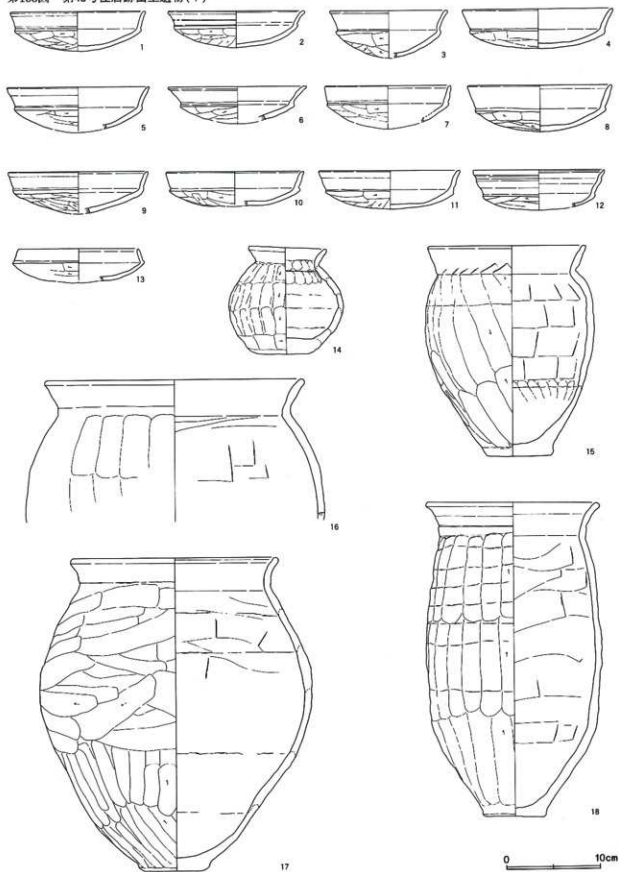
カマド右側から2基の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴Aは平面形態円形を呈し、径0.76×0.77m、深さ0.55mである。上位に緩やかな段を有する。貯蔵穴Bは貯蔵穴Aの右側に隣接する。平面形態楕円形を呈し、径

0.54×0.39m、深さ0.16mである。両貯蔵穴からの遺物の出土はなかったが、いずれも覆土中層から炭化物層が検出された。この炭化物層は観察した限り床面直上の炭化物と対応すると思われる。したがって、両貯蔵穴の下層土が堆積した後には本住居跡は焼失したことになる。

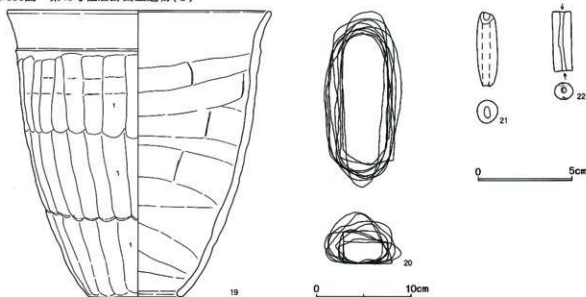
カマドは東壁中央僅かに右よりから検出された。右袖の上部は第2号住居跡に壊されていた。床面と同レベルの燃焼部から斜めに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は傾斜し、先端には明確な握り込みの煙出しピットを有する。燃焼部長0.80m、同幅0.35m、煙道部長1.50m、同幅0.20mであった。燃焼部中央には河原石製の支脚が火床面に食い込むように検出された。燃焼部、袖内面の被熱硬化が顕著であった。カマド内からは15、18の甕が横位で出土した。なお3、5、6の甕も出土したがいずれも残存率は低い。

炭化材は住居跡全域から検出された。また床面の被

第155图 第43号住居跡出土遺物(1)



第156図 第43号住居跡出土遺物(2)



第43号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	14.4	4.2		BCDEGH	B	橙	60	
2	坏	14.4	3.9		BCGH	B	橙	80	破砕後 二次被熱
3	坏	(12.6)	(5.0)		BCEGH	C	鈍黄橙	20	
4	坏	16.2	4.2		BCEGH	B	褐灰	100	二次被熱
5	坏	(15.2)	(4.8)		BCEGH	B	橙	25	カマド
6	坏	(14.8)	(3.9)		BCEH	C	灰黄褐	20	
7	坏	(13.4)	(4.6)		BCDEGH	A	橙	20	
8	坏	15.3	4.9		BCEGH	B	橙	90	
9	坏	(15.0)	(4.5)		BCEGH	B	橙	25	
10	坏	(14.8)	(3.7)		BCDGH	B	橙	25	
11	坏	15.1	4.1		BCGH	B	鈍黄橙	60	二次被熱
12	坏	(14.0)	(4.2)		BCDEGH	A	鈍橙	20	
13	坏	(12.8)	(3.5)		BCEG	A	鈍橙	15	
14	壺	(8.4)	11.5	7.0	BCEGHJ	B	褐灰	70	二次被熱
15	甕	17.0	22.2	7.0	BCDEGH	B	鈍橙	100	カマド
16	甕	(27.8)			BCEGH	C	橙	20	貯蔵穴 A 上層
17	甕	22.2	33.3	7.8	BCDEGH	B	鈍橙	90	
18	甕	18.6	33.2	6.8	BCEGH	A	灰褐	70	カマド
19	瓶	28.4	30.4	10.0	BCEGH	C	褐灰	90	
20	編物石								9個体
21	土錘	長4.02	径2.80	重5.33					
22	管玉	長3.18	径1.03	重4.30					両方向穿孔

熱硬化が顕著であった(第153図スクリーントーン部)。炭化材の軸方向は、ほぼ中央に向かっている。なお南側から検出された炭化材は、長さ4.56mであった。ただし精査を重ねたが、抉り等の加工痕は観察できなかった。東壁際からは葉状の炭化物が密集して検出された。

出土遺物(第155・156図)

遺物は床面直上からの出土が主体を占め、覆土中からは少量出土したのみである。なお炭化材直下からは出土しなかった。坏はカマド内とその周辺からの出土が顕著であった。なお二次被熱痕の認められる個体が多かった。22は碧玉製の管玉である。X線撮影により両側穿孔が明瞭に観察できた。またカマド左軸の左側を中心に編物石が9個体出土している。

(7) 第5住居跡群

11軒の密集する住居跡群を第5住居跡群とする。西側は隣接して町教委調査区である。確認面標高はおおよそ37.9mである。遺構深度は47、53、70・91号住居が浅かったが、それ以外は30cm-50cmと遺存状況は概ね良好であった。

本群は調査区南西端に位置する。周囲には他の住居跡群が存在するが、本群の外周縁はやや遺構の密集度が弱い傾向が見受けられる。また48号住居は重複していたものの、本群は1号溝と南側に位置する4号溝に挟まれて立地するとも言える。なおこの2条の溝はおおよそ30mの距離を置いてはいるが、ほぼ並行しており途中の屈折箇所も対応している。

第70・91号住居の新旧関係は後述するように不分明と言わざるを得ないため、本群中における重複関係についてはやや判断できない箇所があったことを明記しておきたい。調査段階で確認できたのは、48号住居→1号溝、69号住居→35号住居→1号溝、35号住居→4号掘立、69号住居→61号住居→53号住居、61号住居→54号住居→44号住居である。したがって遺構間の重複関係から見て、古相となるのは第69号住居であり、最新相は53号住居となる。

本群中の住居跡形態を概観すると、方形でカマドを壁ほぼ中央に構築するものが主体を占めるが、44号住居は隅カマドを有し、53号住居は横長長方形で隅カマドを有する。この2軒は重複関係、出土遺物から新相を示していると考えて矛盾はない。

遺物の出土傾向は、古相の69号住居においては覆土上層からのものが主体を占めており、その覆土上層土からは灰、焼土粒子も多量に検出された。他群においても覆土から灰が検出された住居跡はいずれも覆土中出土の遺物量が際だっており、住居跡埋没段階における廃棄の可能性が想定できる。

その他の住居跡の床面直上からは坏4~7個体、甕2~3個体が出土した。また47号住居からは炭化材が検出されたが、分布には偏りが見られ、柱材等に想定できるものもなかった。また48号住居のカマド内からは2個体の甕が出土している。

第48号住居跡 (第158図)

第48号住居跡はG-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第1号溝に切られる。

主軸方向はN-65°-Wを指す。主軸長2.95m、副軸長2.71mとやや歪んだ小形の方形を呈する。

覆土は概ね2層からなる自然堆積と考えたが、カマド外側の覆土には炭化物、焼土粒子、灰の含有が顕著であった。

主柱穴、壁溝はなかったが、貯蔵穴に隣接して1基のみピットを検出した。

カマド左側から貯蔵穴が検出された。平面形楕円形を呈し、径0.57×0.48m、深さ0.22mである。肩部より遺物が出土した。なお貯蔵穴覆土からは焼土ブロック、炭化物粒子等が多量に検出された。

カマドは西壁中央から検出された。第1号溝により、袖上部を壊されていた。床面より僅かに低い燃焼部から強く立ち上がり煙道部に移行する。燃焼部長0.62m、同幅0.27m、煙道部長0.32mであった。煙道部は削平された想定される。燃焼部には河原石転用の支脚が直立して検出された。出土位置は右袖側に偏っていた。その直上からは5の甕が横位で出土している。またその前方から6の甕が横位で出土している。灰層の堆積が顕著であった。

出土遺物 (第158図)

少量の遺物が覆土下層-床面直上にかけて出土した。カマド内から出土した2の鉢は二次被熱痕が顕著であった。

第47号住居跡 (第159図)

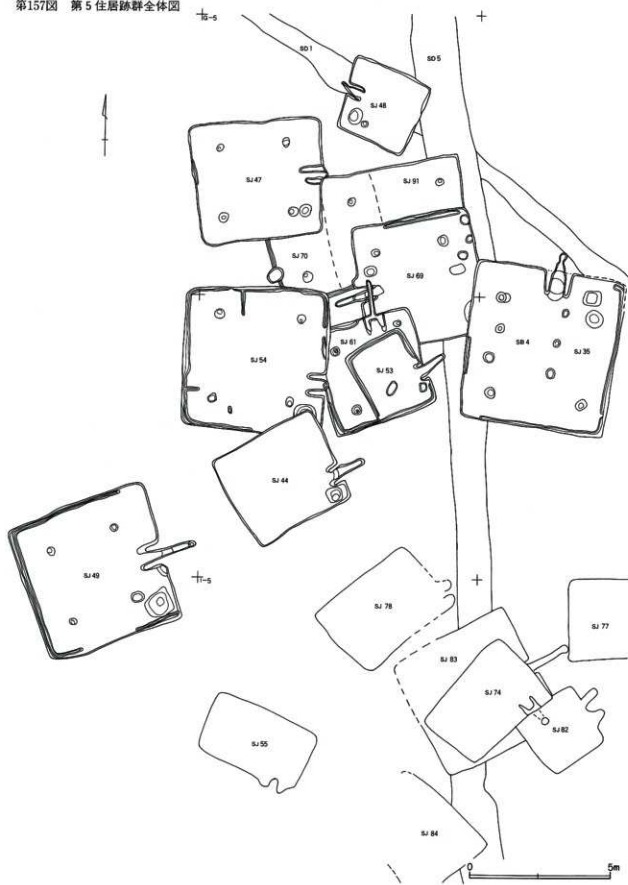
第47号住居跡はG-4・5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第70号住居跡を切る。

本住居跡床面からは炭化材が検出され、覆土下層の第3層は炭化物の含有が顕著であった。

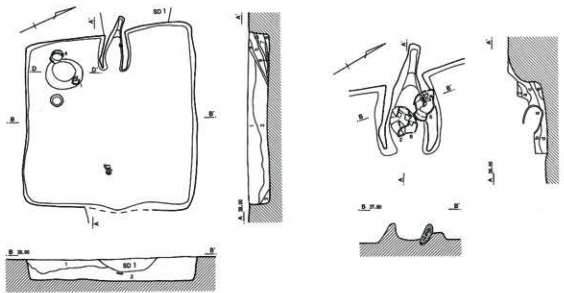
主軸方向はN-85°-Eを指す。主軸長4.48m、副軸長4.20mであり、方形を呈する。壁溝は西壁際で部分的に検出されたに過ぎない。

主柱穴の深さはP1=0.75m、P2=0.38m、P3=0.53m、P4=0.35mである。柱間はP1-2.42m

第157图 第5住居跡群全体图



第158図 第48住居跡・カマド・出土遺物



第48号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土ブロック・灰少量 炭化物粒子微量
- 2 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 4 灰褐色 焼土粒子・炭化物多量 灰少量
- 5 灰褐色 炭化物粒子少量
- 6 灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量 灰多量
- 7 暗灰褐色 炭化物粒子少量
- 8 暗灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子多量
- 9 暗灰褐色 炭化物粒子多量 焼土粒子微量



0 2m

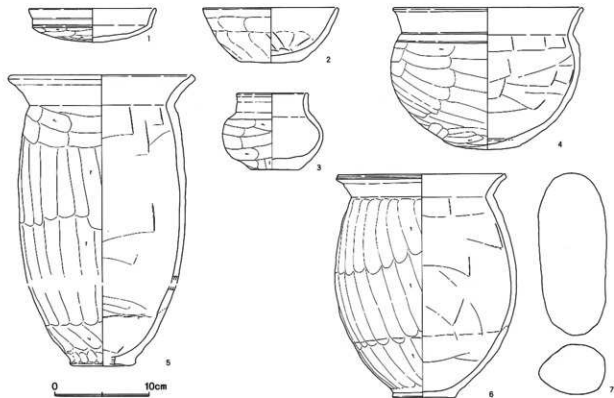
0 1m

貯蔵穴土層註

- 1 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物多量 灰少量
- 2 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子微量
- 3 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物多量 灰少量
- 4 暗灰褐色 焼土粒子少量

カマド土層註

- a 暗灰褐色 焼土ブロック多量
- b 灰褐色 焼土ブロック多量
- c 灰褐色 焼土粒子少量
- d 暗灰褐色 灰・炭化物粒子多量 焼土粒子少量 (灰層)
- e 暗灰褐色 炭化物少量



第48号住居跡出土遺物観察表

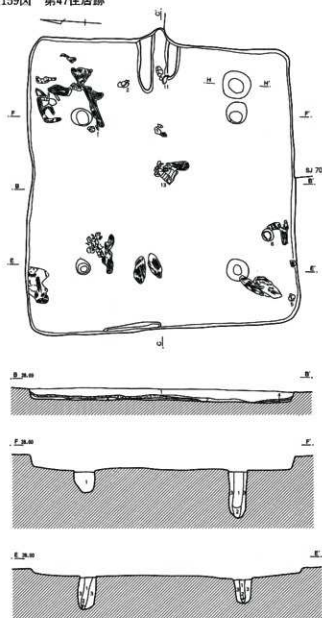
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	13.6	3.6		BCEGH	C	鈍橙	95	貯藏穴上層
2	鉢	14.4	5.8	6.3	BCEGDH	A	灰褐	95	カマド 二次被熱
3	壺	7.7	8.1	5.1	BCEFGH	B	鈍橙	85	
4	鉢	20.4	15.0	8.5	BCEGH	A	橙	85	貯藏穴上層
5	甕	(20.0)	(30.8)	(7.0)	BCEGH	B	橙	35	カマド
6	甕	18.1	23.6	6.6	BCEGH	A	灰褐	85	カマド
7	編物石								1個体

—P 2—2.45m—P 3—2.40m—P 4—2.45m—P 1
であった。P 1、P 2、P 3の土層断面は柱痕を示す
ものと考えらる。

カマド右側から貯藏穴が検出された。径0.45×0.42
m、深さ0.52mで平面形態は小形の円形を呈する。

カマドは東壁ほぼ中央から検出された。床面と同レ

第159図 第47住居跡



第47号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土粒子・炭化物少量
- 2 灰色 焼土粒子微量 炭化物少量
- 3 灰色 炭化物極少量 (炭化物層)
- 4 灰黄褐色 炭化物・焼土粒子少量

柱穴土層註

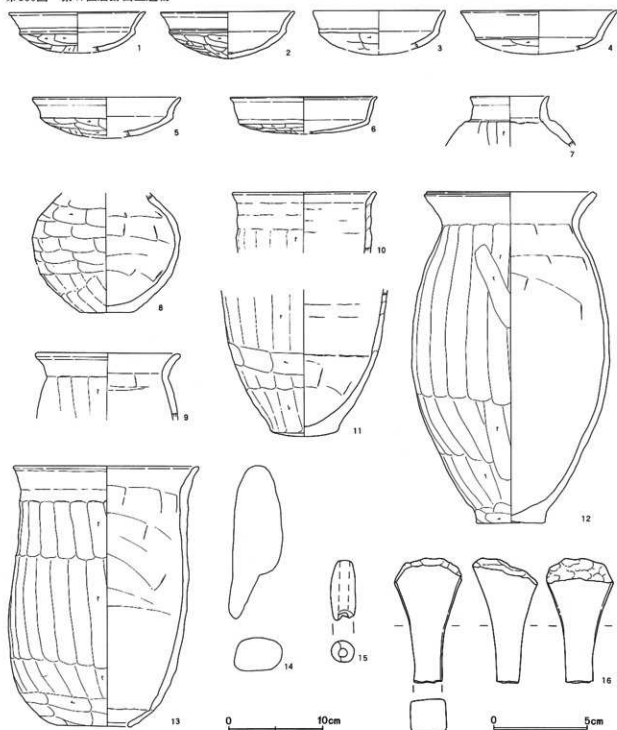
- 1 暗灰褐色 焼土粒子微量 炭化物少量
- 2 灰白色 粘土質 しまり強し
- 3 暗灰褐色 しまり強し

カマド土層註

- a 灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子微量
- b 暗灰褐色 灰多量 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- c 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子・灰少量

0 2m

第160図 第47住居跡出土遺物



ペルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部は削平された可能性が高い。カマド長1.05m、同幅0.18mであった。

床面直上からは炭化材が散在して出土したが、遺存状況は悪く、1mを超えるような材は出土していない。出土方向も一定しておらず不規則であった。

出土遺物（第160図）

遺物は床面直上を中心にして出土した。環は口縁部が大きく開く蓋模倣が主体を占める。

13の甕は底部付近から強く屈曲している。16は砥石である。本調査区の竪穴住居跡から出土した砥石は本例のみである。

第47号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	(14.6)	(4.3)		BCEGH	A	橙	25	
2	環	14.4	5.0		BCEGH	A	橙	60	
3	環	(14.1)	(4.2)		CDEH	C	灰褐	15	
4	環	16.6	(4.6)		BCEGH	B	橙	15	
5	環	15.8	(14.8)		BCEGH	C	鈍橙	65	
6	環	(15.6)	(4.0)		BCDEGH	A	橙	25	
7	壺	(8.4)			BCEGH	A	明赤褐	20	
8	壺			5.8	BCEGH	A	橙	100	
9	甕	15.6			BCEGH	C	鈍橙	20	
10	甕	(15.4)			BCEGH	C	灰黄褐	25	
11	甕			7.0	BCEGH	A	明赤褐	65	カマド
12	甕	(18.4)	35.1	7.2	BCEGH	A	明赤褐	70	
13	甕	19.8	27.5	7.4	BCEH	A	明赤褐	75	
14	編物石								1個体
15	土跡	長(3.17)	径1.43	重(4.87)					欠損
16	砥石	長(6.60)	幅3.70	厚1.70					

第53号住居跡 (第161図)

第53号住居跡はH-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第61号住居跡を壊していた。

主軸方向はN-58°-Eを指す。主軸長2.28m、副軸長2.93mであり、横長の長方形を呈する。壁溝は部分的に途切れるがほぼ全周する。覆土は自然堆積を示すと考えるが、第4層は炭化物粒子を多量に含有していた。柱穴と認定できるピットは検出されなかった。

カマド右側から貯蔵穴が検出された。径0.32×0.32

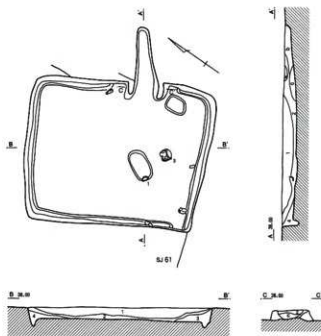
m、深さ0.04mである。平面形態は不整な方形である。

カマドは東壁中央よりから検出された。袖の遺存状況は悪かった。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに煙道部に移行する。カマド長1.15m、燃焼部幅0.31mであった。カマド内部から遺物の出土はなかった。

出土遺物 (第162図)

少量の遺物が床面直上から出土した。1の環は住居跡中央にあるピット肩部から検出された。

第161図 第53号住居跡



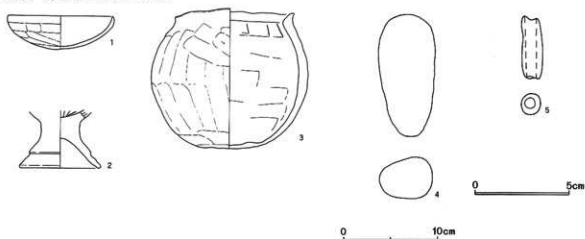
第53号住居跡土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物少量 焼土ブロック微量
- 2 灰色 炭化物微量
- 3 灰褐色 焼土ブロック・炭化物微量
- 4 暗灰褐色 炭化物多量 焼土粒子少量

カマド土層註

- a 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量 (天井積層土)
- b 暗灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- c 暗灰褐色 焼土ブロック・灰多量 炭化物粒子少量 (灰層)

第162図 第53号住居跡出土遺物



第53号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	11.4	3.5	(8.7)	BCH	B	橙	90	磨耗顯著 1個体
2	高環				BCEGH	A	橙	50	
3	壺	12.4	14.9		CGF	B	橙	90	
4	編物石								
5	土錘	長3.40	径1.28	重5.06					

第35号住居跡 (第163・164図)

第35号住居跡はG-6、H-5・6グリッドに位置する。遺構との重複関係は第69号住居跡を切り、第1、5号溝に切られる。また床面を第4号掘立柱建物跡の柱穴に壊されていた。

主軸方向はN-8°-Eを指す。主軸長5.51m、副軸長5.38mであり、方形を呈する。残存壁高も0.46mを測り遺構の遺存状況は良好であった。壁溝は東、南壁際から検出されたが、西壁際は検出されなかった。

覆土下層には部分的に焼土層が認められたが床面直上からは炭化材等は検出されなかった。

主柱穴の深さはP1=0.98m、P2=0.89m、P3=0.78m、P4=0.85mである。P2覆土第1、3層は抜き取り痕を示していると考えられる。柱間はP1-3.10m-P2-3.26m-P3-3.41m-P4-3.41m-P1であった。

カマド右側から貯蔵穴が検出された。平面形態は隅円方形で径0.65×0.54m、深さ0.78mと深かった。貯蔵穴第2層は炭化物層である。底面～覆土下層からは遺物は出土しなかった。

カマドは北壁中央から検出された。床面レベルよりやや低く楕円形に掘削された燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に移行する。煙道部底面は水平であった。先端には明確な掘り込みは認められなかったが、平面形態は円形を呈していた。

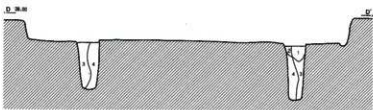
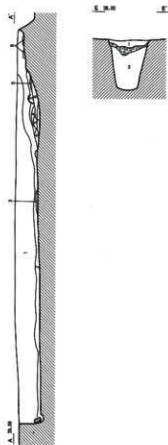
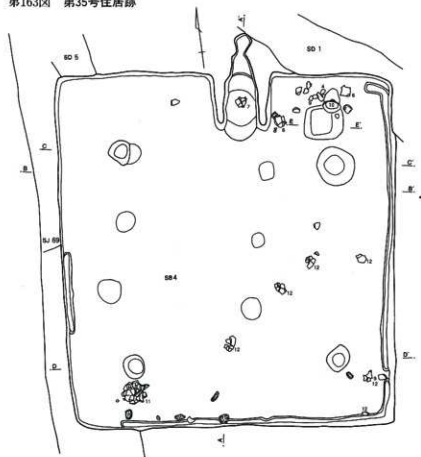
燃焼部中央からは完形の7の環が逆位で出土した。転用支脚と思われる。燃焼部長0.89m、同幅0.48m、煙道部長0.61m、同幅0.29mであった。両軸の遺存状況は良好であった。

なおカマド覆土および7の出土状況から、燃焼部の最終的な使用面はd層上面であったと思われる。

出土遺物 (第165図)

遺物は床面直上から出土し、貯蔵穴周辺からはややまとまって検出された。6は体部の稜が緩やかで、口縁部上位は緩く外反するが、雑な整形で器壁も厚く、赤彩は認められなかった。10の甕は胴部最大径を肩部付近に有する。煤の付着が認められ、煮沸に使用されたと思われる。11は南壁際から検出された。12の壺は床面中央から散逸して出土した。14は土錘、15は土製勾玉と思われる。南壁際から編物石が3個体出土している。

第163図 第35号住居跡



第35号住居跡土層註

- 1 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- 2 灰褐色 焼土ブロック多量 炭化物粒子少量
- 3 灰褐色 焼土ブロック多量
- 4 灰黄褐色 炭化物粒子微量

柱穴土層註

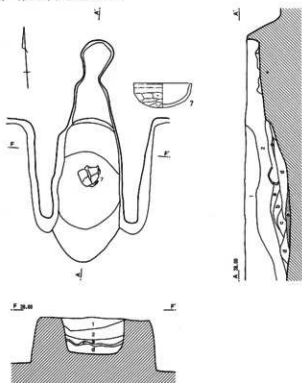
- 1 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- 2 暗灰褐色 焼土ブロック少量 炭化物粒子多量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子微量
- 4 灰黄褐色 しまり強し

貯蔵穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物微量
- 2 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物多量
- 3 黒灰褐色 炭化物粒子微量

0 ————— 2m

第164図 第35号住居跡カマド



第35号住居跡カマド土層註

- a 灰褐色 焼土ブロック・炭化物多量 灰少量
- b 灰黄褐色 焼土ブロック・炭化物粒子微量
- c 灰褐色 焼土ブロック少量 灰多量
- d 灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子多量 灰少量
- e 赤褐色 焼土層
- f 黒灰褐色 焼土ブロック少量



第35号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.2)	(4.4)		BCEGH	B	橙	40	
2	坏	13.0	5.2		BCEGH	A	赤	60	
3	坏	(13.4)	(5.0)		BCEGH	B	橙	20	
4	坏	(13.6)	(5.0)		BCEGH	B	橙	15	
5	坏	(13.8)	(4.6)		BCEGH	C	鈍赤褐	20	
6	坏	(13.4)	5.5		BCEGH	B	橙	35	
7	坏	12.4	5.2		BCEGH	B	鈍黄橙	100	カマド
8	甕	(13.8)	(15.1)	(4.7)	BCEGH	B	橙	50	
9	甕	(25.8)			BCEGH	B	橙	35	
10	甕	26.8	29.7	7.6	BCEGH	B	鈍橙	100	貯蔵穴上層
11	甕	19.8	32.9	6.6	BCEH	B	鈍橙	95	
12	壺	10.8	26.5		CGH	A	橙	80	
13	編物石								3個体
14	土錘	長(3.10)	径1.45	重(5.65)					欠損
15	勾玉	長(2.82)	幅1.06	重(3.97)					欠損 土製

第69号住居跡 (第166・167図)

第69号住居跡はG-5、H-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第35、61号住居跡、第5号溝に切られ、第70、91号住居跡を切っていた。ただし遺構深度が深かったため、概ね遺存状況は良好であった。

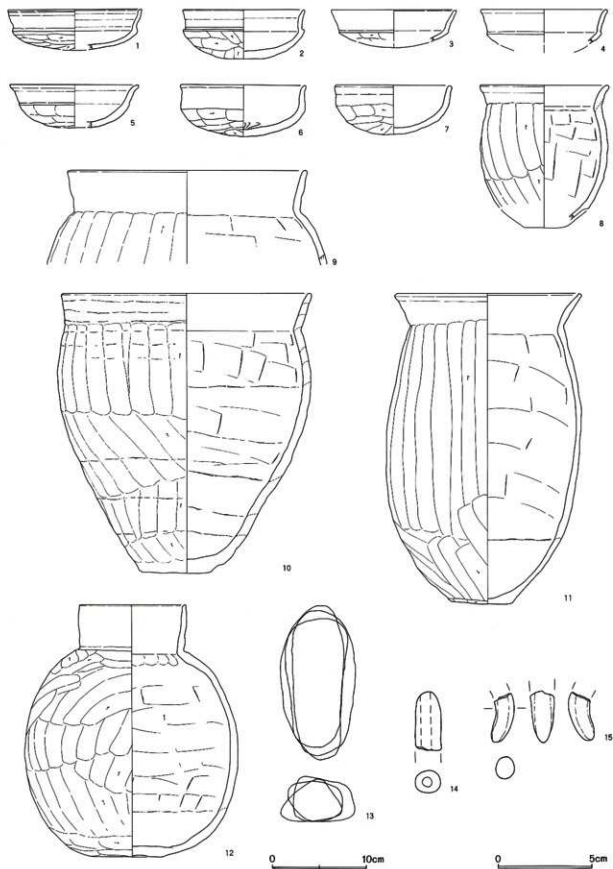
覆土上層はレンズ状堆積を示しており、第4層には灰、焼土粒子を極めて多量に含有していた。本遺跡の

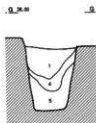
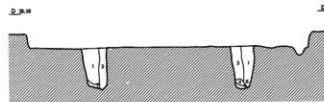
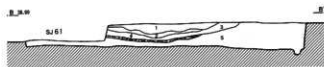
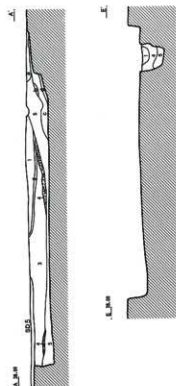
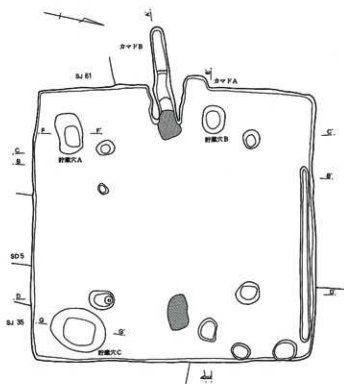
住居跡覆土において、炭化物層は多く認められるものの、灰層が検出されたのは、第42、79号住居跡と本住居跡のみである。

主軸方向はN-102°-Wを指す。主軸長4.33m、副軸長4.46mであり、方形を呈する。北壁際のみから壁溝が検出された。

主柱穴の深さはP1=0.48m、P2=0.67m、P3

第165图 第35号住居跡出土遺物





第69号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土ブロック少量 炭化物微量
- 2 灰褐色 灰多量 焼土ブロック・炭化物微量
- 3 灰褐色 焼土ブロック・炭化物微量
- 4 灰色 炭化物粒子・焼土粒子極多量 (炭化物層)
- 5 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物少量

柱穴土層註

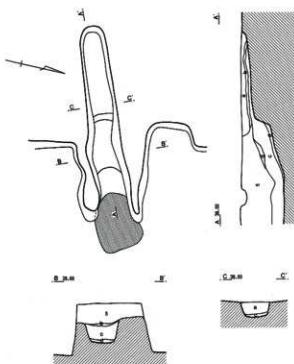
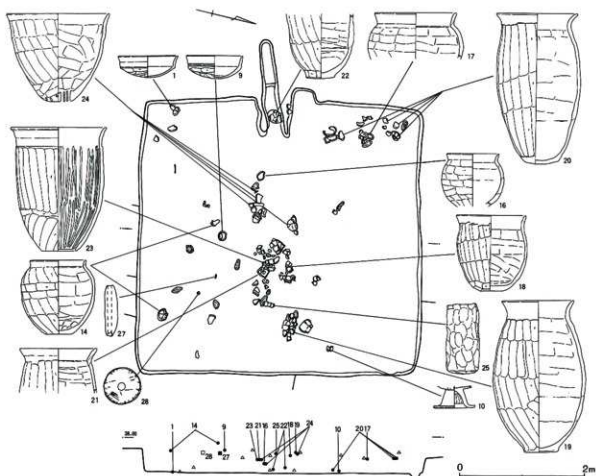
- 1 暗灰褐色 炭化物少量
- 2 暗灰褐色 地山褐色土ブロック少量
- 3 灰黄褐色 灰色粘土少量
- 4 灰黄褐色 炭化物少量 灰色粘土微量
- 5 暗灰褐色 炭化物少量
- 6 灰白色 粘土質 しまり強し
- 7 灰白色 粘土質 しまり強し

前竈穴土層註

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子少量 焼土ブロック・灰色粘土ブロック微量
- 2 暗灰褐色 炭化物粒子微量 焼土ブロック少量
- 3 灰褐色 炭化物粒子微量 炭化物少量
- 4 極暗灰褐色 炭化物粒子少量 灰色粘土ブロック微量
- 5 灰黄褐色 炭化物微量 灰色粘土ブロック少量



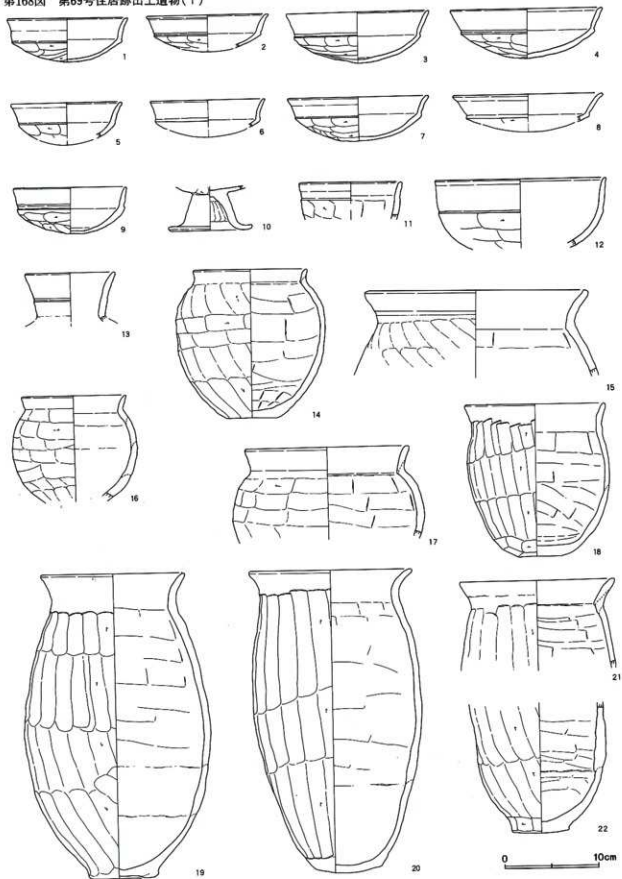
第167図 第69号住居跡遺物分布図・カマド



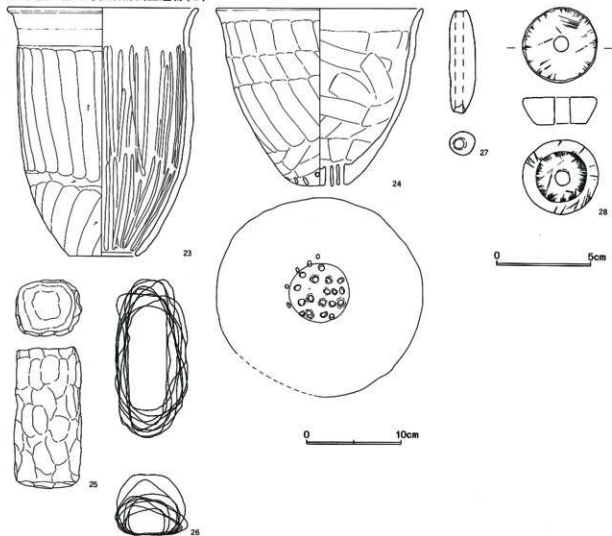
第69号住居跡 カマド土層註

- a 灰褐色 天井崩落土 下面被熱硬化顯著
- b 灰色 灰化物多量 焼土ブロック少量
- c 灰色 焼土粒子・灰多量 灰化物少量
- d 灰色 灰主体 焼土粒子微量 (灰層)

第168图 第69号住居跡出土遺物(1)



第169図 第69号住居跡出土遺物(2)



=0.66m、P4=0.65mである。柱穴覆土は抜き取り痕を示していると考えられる。柱間はP1-2.39m-P2-2.35m-P3-2.40m-P4-2.31m-P1であった。また北東には不規則な配列のピットが3基検出されたが、深さは0.05m前後で浅いものである。

また住居跡東側からは焼土堆積が検出されたが、床面からは被熱硬化部は検出されなかった。

貯蔵穴は3基検出された。南西コーナー部の貯蔵穴Aは径0.40×0.62m、深さ0.48mの不整形円形を呈する。

貯蔵穴BはカマドAの前方に位置し、同時には使用できなかったため、カマドの造り替え後に構築されたものと思われる。径0.36×0.43mで平面円形を呈する。

貯蔵穴Cは南東コーナー部より検出された。3基の貯蔵穴中最も規模が大きい。径0.87×0.69m、深さ

1.15mであった。いずれの貯蔵穴からも遺存状況の良好な遺物は出土しなかった。

カマドは西壁側から2基検出された。袖の有無からAからBへの造り替えが想定される。カマドAは壁面がおよそ0.25m掘削された状態で検出された。煙道部は削平されたと思われる。燃焼部の痕跡は検出されなかった。

カマドBは床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に移行するが、立ち上がり部は、壁面よりやや奥にある。残存する煙道部は住居跡主軸からややずれている。煙道部底面は水平であった。燃焼部長0.91m、同幅0.28m、煙道部長0.70m、同幅0.21mであった。袖内面および燃焼部の被熱硬化が顕著であった。

第69号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	13.0	4.6		BCGH	A	橙	95	白色粘土含有
2	環	(13.0)	(4.9)		BCEGH	B	橙	25	
3	環	15.2	5.4		BCEGH	A	橙	90	白色粘土含有
4	環	16.2	5.3		BCEGH	A	橙	85	
5	環	(11.8)	(4.5)		BCEGH	B	橙	30	
6	環	(12.2)	(3.9)		BCEG	B	橙	15	
7	環	15.0	4.6		BCEGH	A	赤	75	二次被熱
8	環	(16.0)	(3.9)		BCEGH	A	橙	10	
9	環	12.1	4.9		BCDEGH	C	鈍橙	95	覆土上層
10	高環			8.9	BCDEFGH	B	橙	80	
11	鉢	(11.0)			BCDEGH	A	橙	25	
12	鉢	(18.2)			BCEGH	B	橙	20	
13	壺	(9.6)			BCEGH	B	橙	20	
14	甕	12.2	15.8	5.5	BCEFGH	C	鈍黄橙	60	覆土上層
15	甕	(24.0)			BCEGH	B	鈍橙	30	
16	甕	(11.2)			BCDEGH	B	橙	45	覆土上層
17	甕	(17.6)			BCGH	C	鈍黄橙	35	覆土上層 二次被熱顯著
18	甕	15.0	16.1	4.5	BCGH	B	鈍橙	45	覆土上層
19	甕	(15.4)	32.6	7.2	BCGH	B	鈍橙	60	覆土上層
20	甕	17.6	32.0	6.7	BCGH	C	鈍橙	80	SJ-70上層と接合
21	甕	16.6			BCEGH	B	橙	25	覆土上層
22	甕			6.0	BCH	A	明赤褐	70	カマドB
23	甕	20.4	26.3	7.4	BCGH	B	橙	90	覆土上層
24	甕	22.1	18.7	6.4	BCEGH	B	橙	85	覆土上層 多孔(底部周縁も孔)
25	支脚	6.4	14.5	6.7	BCEGHJ		橙	100	未焼成 9個体
26	編物石								
27	土錘	長5.53	径1.55	重11.34					
28	紡錘車	上径4.02	下径2.70	厚3.148	重39.27				石製

出土遺物(第168・169図)

遺物は主に覆土上層～下層にかけて出土した。特に住居跡中央部から多量に検出されたが、上記したレンズ状堆積に対応すると思われる。北西コーナー部においても遺物は外側から流入した状況を呈している。

また20の甕は本住居跡に壊される第70号住居跡覆土上層との遺構間接合資料であるが、いずれも上層出土であり、遺構の新旧関係から本住居跡覆土上層に帰属するものとする。

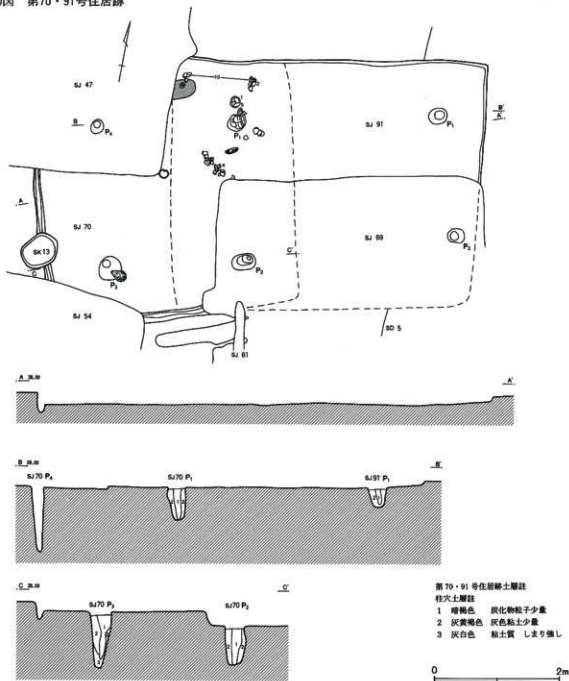
1、3の環の胎土には白色粘土が確認された。24の甕は底部周縁にも穿孔が施されているが、やや乱雑である。25は土製支脚であるが、覆土上層からの出土である。中実で上、下面のみ僅かに凹状となる。外面には指頭瓦痕が明瞭に残る。28は石製の紡錘車である。上、下面とも磨痕が認められる。編物石は覆土上層を中心に9個体出土している。

第70・91号住居跡(第170図)

第70、91号住居跡はG-5グリッドに位置する。プラン確認段階で、第47、69号住居跡と重複する長方形のプランを検出し、覆土除去段階では1軒の住居跡と認識して調査を進めた。精査段階で、床面レベルはほぼ同一だったものの、第47号住居跡に壊される被熱硬化面が検出された。

これを長方形プランの住居跡のカマド燃焼部の痕跡と仮定すると、類例のないカマド位置になる。また検出された柱穴の柱間にも偏りが見られることから、2軒の住居跡の重複と判断し、西から第70、91号住居跡とする。なお遺構深度が浅かったことと、第91号住居跡範囲内からは良好な遺物が出土しなかったことから両住居跡の新旧関係は不明である。なお第170図中の破線は、残存していたプランと柱穴配列から想定したものである。

第170図 第70・91号住居跡



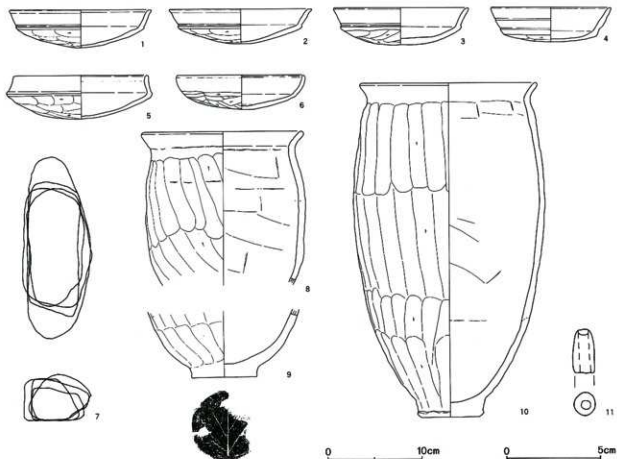
第70号住居跡は被熱硬化面をカマド痕跡と仮定すると主軸方向はN-12°-Wを指す。主軸長は4.10mである。主柱穴の深さはP 1=0.54m、P 2=0.63m、P 3=0.90m、P 4=1.03mである。柱穴覆土は柱痕を示していると考えられる。柱間はP 1-2.16m-P 2-2.28m-P 3-2.21m-P 4-2.20m-P 1であり、近似した数値を示す。

また上記したように被熱硬化面が検出されたが、袖

や灰層などは検出されなかった。この点のみを考慮すると本住居跡は第91号住居跡に壊されたことになるが、カマドの造り替えの可能性もあり、新日は不明とせざるを得ない。

第91号住居跡の残存する北壁の方向はN-12°-Wを指す。ピットは2基検出された。深さはP 1=0.30m、P 2=0.36mである。P 1-1.92m-P 2である。壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

第171図 第70号住居跡出土遺物



第70号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	15.1	4.0		BCEGH	A	明赤褐	95	
2	坏	15.2	3.7		BCEGH	A	赤	70	
3	坏	(14.4)	4.0		BCEGH	A	明赤褐	25	
4	坏	12.8	3.6		BCEGH	C	鈍橙	90	
5	坏	14.4	4.7		BCDEGH	A	橙	65	
6	坏	13.8	3.7		BCDEGH	A	鈍橙	90	
7	編物石								4個体
8	甕	17.4			BCEGH	B	赤	100	
9	甕			7.0	BCH	A	黒褐	70	木葉底
10	甕	(18.8)	35.5	7.0	BCEGH	C	鈍黄橙	55	
11	土鍾	長(2.32)径(3.20)重(3.22)							欠損

出土遺物 (第171図)

上記したように、図化した出土遺物もどちらの住居跡に帰属するかは不明である。なお両住居跡が重複していた部分から遺物はまとめて出土した。

10の甕は第70号住居跡の被熱硬化部周辺から出土した。胴部やや上位に最大径を有し、口縁部は短く、外傾するものである。

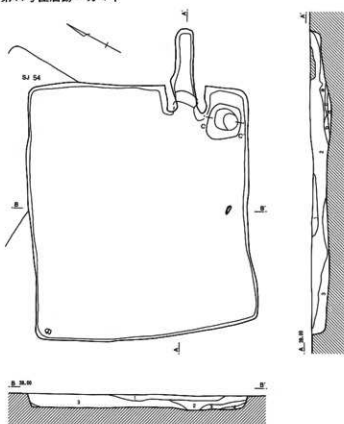
第44号住居跡 (第172図)

第44号住居跡はH-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第54号住居跡を切る。

主軸方向はN-65° - Eを指す。主軸長4.07m、副軸長3.49mであり、やや縦長の方形を呈する。壁溝は検出されなかった。

主柱穴に想定されるピットは検出されなかった。

第172図 第44号住居跡・カマド



貯蔵穴

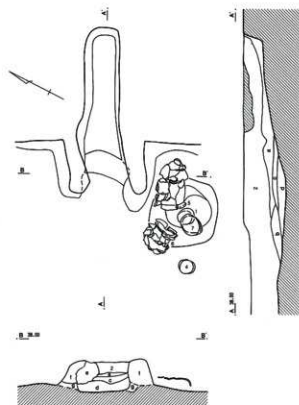
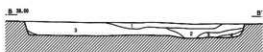


第44号住居跡土層註

- 1 灰黄褐色 焼土粒子少量
- 2 黒灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 3 灰褐色 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 4 灰黄褐色 炭化物粒子・灰多量

貯蔵穴土層註

- 1 灰色 炭化物多量 焼土ブロック少量

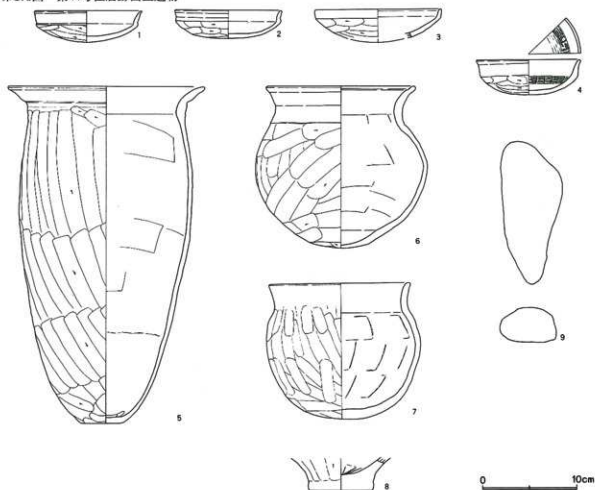


カマド土層註

- a 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量
- b 灰褐色 炭化物粒子少量
- c 灰褐色 炭化物粒子少量 焼土ブロック・灰多量
- d 灰褐色 炭化物・灰多量 焼土ブロック・骨粉少量
- e 灰褐色 焼土粒子極多量 (袖筋腐土)
- f 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- g 灰黄褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量



第173図 第44号住居跡出土遺物



第44号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	11.6	3.3		BCDEGH	B	橙	100	貯蔵穴
2	坏	11.4	3.2		BCEGH	A	明赤褐	80	
3	坏	(13.6)	(3.5)		BCEGH	B	橙	25	
4	坏	11.0	3.7		BCDGH	B	橙	100	内面断続木口ナデ明瞭
5	甕	20.9	35.8	4.3	BCGH	B	鈍橙	95	貯蔵穴
6	壺	16.0	17.2	6.4	BCEGH	A	明赤褐	90	貯蔵穴
7	甕	15.1	14.4	(10.5)	BCDEGH	B	橙	100	貯蔵穴
8	甕			7.0	BCEGH	A	橙	100	
9	編物石								1個体

カマド右側から貯蔵穴が検出された。径0.51×0.54 m、深さ0.19 mである。上位で不整な段を有する。

カマドは東壁右よりから検出された。床面レベルより僅かに低い燃焼部から緩やかに傾斜しながら煙道部に移行する。煙道部天井が部分的に残存していた。

袖の崩落が顕著であり、遺存長であるが、燃焼部長0.39 m、同幅0.34 m、煙道部長1.00 m、同幅0.30 mであった。袖の構築土は2層からなり下層の8層は焼土、

炭化物粒子を含有していた。カマド内部からの遺物の出土はなかった。

出土遺物 (第173図)

貯蔵穴およびその肩部から遺物がまとめて検出された。1、2の蓋模倣の坏はいずれも口径が1 cm代と小さい。3は口縁部上位が内屈する。体部は口縁部直下よりヘラケズリされる。4の坏内面は木口状工具による断続ナデが明瞭に残る。

第54号住居跡 (第174・175図)

第54号住居跡はH-4・5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第44号住居跡に切れ、第61、70号住居跡を切る。

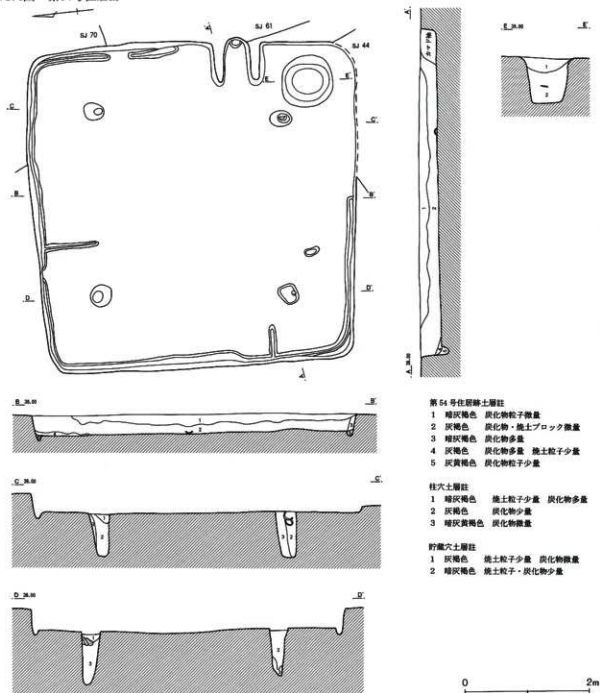
主軸方位はN-95°-Eを指す。主軸長5.14m、副軸長5.19mであり、方形を呈する。断続した壁溝が巡る。また壁溝から分岐するような間仕切り状の溝が2

箇所から検出された。

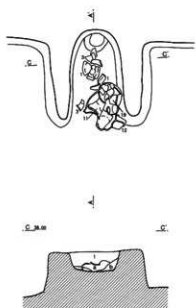
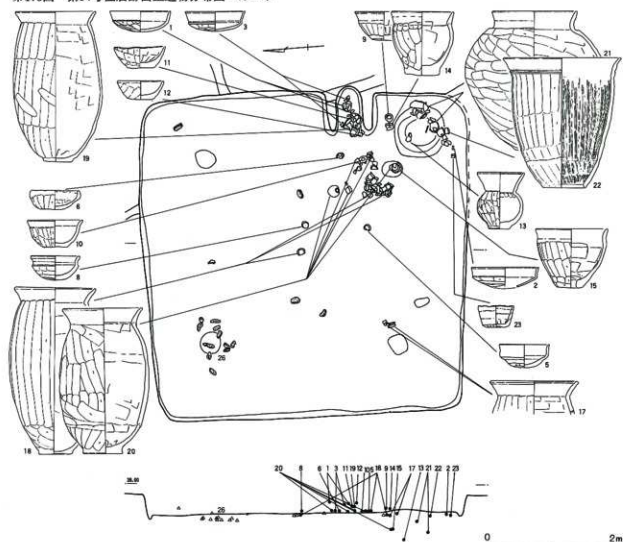
覆土は自然堆積を示すと考えるが、壁際の三角堆積土からは多量の炭化物が検出された。

主柱穴の深さはP1=0.72m、P2=0.78m、P3=0.85m、P4=0.67mである。P1覆土上層からは15の瓶が完形で出土した。P3覆土上層からは編物石が出土している。柱間はP1-2.80m-P2-3.05m

第174図 第54号住居跡



第175図 第54号住居跡出土遺物分布図・カマド

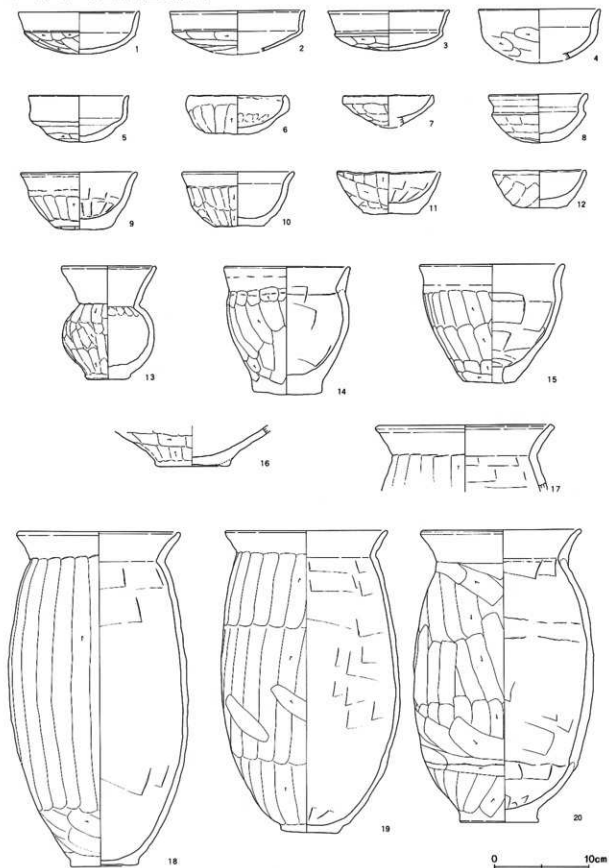


第54号住居跡 カマド土層柱

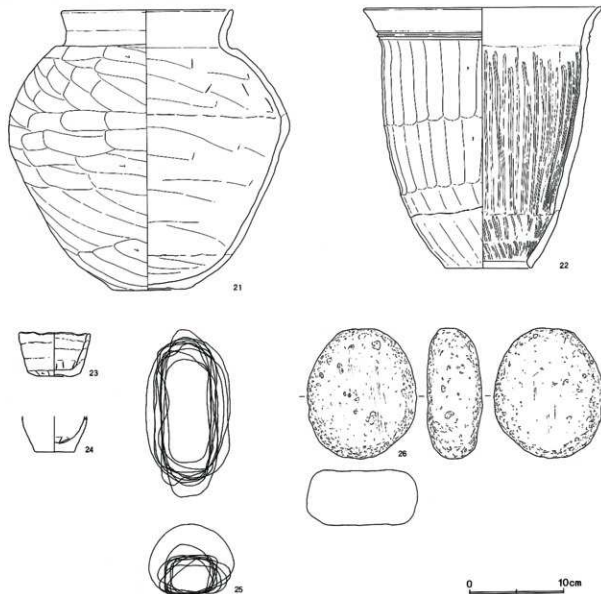
- a 暗灰褐色 焼土ブロック多量 (天井崩落土)
- b 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子少量 灰多量
- c 灰褐色 焼土ブロック少量



第176図 第54号住居跡出土遺物(1)



第177図 第54号住居跡出土遺物(2)



第54号住居跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	環	13.0	4.5		BCEGH	A	橙	100	
2	環	(14.4)	(4.6)		BCDEGH	B	明赤褐	25	貯藏穴と接合
3	環	(13.0)	4.3		BCDEGH	B	橙	30	
4	環	(13.0)	(5.7)		BCDEGH	C	灰黄褐	20	カマド 粗製
5	環	10.8	5.0		BCDEGH	B	鈍黄橙	95	
6	鉢	10.2	4.1		BCEGH	B	明赤褐	90	片口状を呈するが不整・粗製
7	環	(9.6)	(3.5)		BEG	C	鈍橙	30	カマド 粗製
8	鉢	10.6	5.1		BCEFGH	C	橙	85	
9	鉢	12.6	6.0	6.2	BCGH	B	鈍黄橙	80	
10	鉢	11.9	5.7	5.6	BCDEGHJ	B	橙	100	
11	甕	[11.0]	4.5	6.0	BCEGH	A	灰褐	85	擬口縁
12	鉢	[10.0]	(4.0)	(5.8)	BCEGH	B	橙	50	擬口縁
13	壺	(10.2)	12.1	4.8	BCDEGH	B	橙	90	貯藏穴
14	甕	13.7	13.6	7.4	BCEGH	B	鈍橙	95	貯藏穴と接合
15	甕	15.6	12.6	5.5	BCGHJ	A	橙	95	孔径2.7cm

第54号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
16	壺		4.3	8.0	BCEGH	B	橙	70	カマド
17	甕	(19.2)			BCEGH	B	橙	40	
18	甕	17.5	35.4	7.2	BCEH	A	鈍橙	95	内面オコゲ斜位付着
19	甕	17.3	32.0	6.4	BCGH	B	橙	90	
20	甕	17.1	31.2	8.4	CDFGH	B	橙	90	カマド・貯蔵穴と接合
21	甕	18.4	29.6	7.8	BCGH	B	橙	75	貯蔵穴
22	甕	25.5	28.5	8.7	BCGH	B	鈍橙	50	貯蔵穴
23	ミニチュア	(7.6)	4.6	5.7	BCEGH	B	橙	45	
24	ミニチュア			4.2	BCEGH	B	橙	90	カマド
25	編物石								11個体
26	磨石	長13.8	幅11.6	厚5.7					

—P 3—2.95m—P 4—2.95m—P 1であった。

カマド右側から貯蔵穴が検出された。径0.80×0.80m、深さ0.73mである。平面形態円形で、上位で緩やかな段を有する。貯蔵穴覆土および肩部からは遺物が出土した。

カマドは東壁中央右よりから検出された。カマド形態はやや特異であり、袖内部底面は床面よりレベルが高く、焼成部が不明瞭であった。煙道部先端には煙出しピットを有するが、他住居跡と比較して、径が小さい。カマド長0.77m、焼成部幅0.35mであった。カマド内部からは、多量の遺物が出土した。環、鉢が4個体出土したが、出土状況はやや浮いていた。転用支脚の可能性もある。19の甕は横位で検出された。

出土遺物(第176・177図)

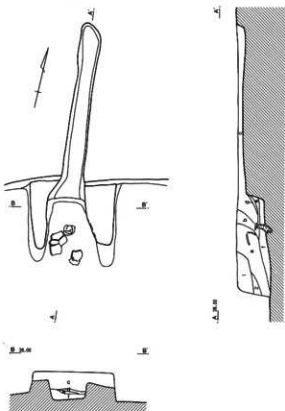
遺物は主に床面直上から出土した。カマド前方および貯蔵穴周辺に分布が偏っていた。

6は粗製の鉢型土器である。片口状に口縁部がやや張り出す。7はカマド内部から出土した。器形的には北武蔵型環に近いが、器壁は厚く、成形、調整は雑である。ヘラケズリは口縁部直下から施される。11はカマド内部から出土した甕底部であるが、周辺に同一個体の破片がなかったこと、割れ口が均一なことから擬口縁と思われる。13はほぼ完形で貯蔵穴最下層から出土した小形の壺形土器である。胴部中位に最大径を有し、大きく屈曲して口縁部に至る。外面は縦位ヘラケズリを施し、頸部接合部には指頭王痕が明瞭に残る。焼成は良好で橙色を呈する。

18の甕内面にはオコゲ状の黑色粒痕が斜位に付着し

ていた。20の甕は床面直上から散逸して出土したが、P 1覆土中層からも同一個体が出土しており、P 1抜き取り後の流入と思われる。21は底部がやや上げ底となり、胴部中位で最大径を有する。そこから強く内傾し、直に立ち上がる頸部に移行する。口縁部は木口ナ

第178図 第61号住居跡カマド



第61号住居跡カマド土層註

- a 暗灰褐色 焼土ブロック少量 炭化物粒子微量
- b 暗灰褐色 焼土ブロック多量 炭化物粒子・灰少量
- c 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子微量
- d 灰褐色 灰主体 焼土ブロック少量(灰層)
- e 暗灰褐色 焼土粒子少量 炭化物粒子多量
- f 暗褐色 焼土粒子・炭化物粒子・灰微量

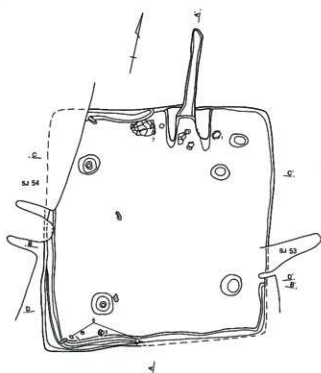


デにより段を有する。23、24はミニチュア土器である。
 編物石がP3周辺から9個体出土したがP3覆土上層
 から2個体出土している。重量のある編物石の自然
 流入は考え難く、P3覆土第2層の堆積後に廃棄され
 たと思われる。26は角閃石製の磨石である。両面に擦
 痕が認められた。

第61号住居跡 (第178・179図)

第61号住居跡はH-5グリッドに位置する。他遺構

第179図 第61号住居跡



との重複関係は第69号住居跡を切り、第53、54号住居
 跡に切られる。北西コーナー部以外の床面は遺存して
 いたが、覆土の大半は第53号住に壊されていた。

主軸方向はN-13°-Wを指す。主軸長3.74m、副
 軸長3.57mであり、方形を呈する。床面は中央部が僅
 かに高かった。断続した壁溝が巡るが、東壁際からは
 検出されなかった。

主柱穴の深さはP1=0.52m、P2=0.48m、P3



第61号住居跡土層註

- 1 灰褐色 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗灰褐色 焼土粒子少量 炭化物粒子多量
- 3 暗灰褐色 炭化物粒子多量

柱穴土層註

- 1 灰褐色 灰白色粘土多量
- 2 灰白色 粘土主体
- 3 灰黄褐色 灰白色粘土微量 しまり強し

